



元総社蒼海遺跡群(31)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 0 . 1 2

前橋市教育委員会



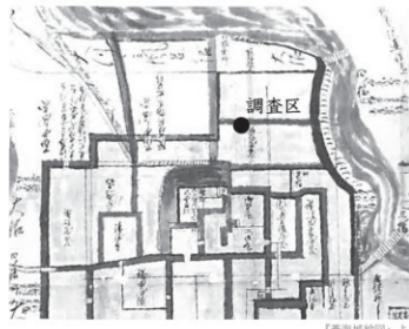






元総社蒼海遺跡群(31)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2010.12

前橋市教育委員会





元総社蒼海遺跡群（31）調査区全景（合成写真 上が東）



『蒼海城絵図』（複製 前橋市總社資料館蔵）

本絵図は總社長尾氏在城時の蒼海域の姿を現していると考えられているものである。東に牛池川、南に染谷川に囲まれた場所に立地し、両河川が外堀の役目を担っている。城内には幾重もの堀を巡らして郭を形成し、中央部には本丸・二の丸、御靈社がある郭の北西側は沼の存在も窺える。元總社蒼海遺跡群（31）で確認された堀は本丸の北側にみられる源訪屋敷の堀と考えられる。



はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、國分僧寺、國分尼寺、國府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、諸代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群(31)は上野国府の中核域と推定していた場所に隣接することから、調査成果に期待しておりましたが、古墳時代の堅穴住居跡と中世蒼海城の堀跡を検出するにとどまり、国府そのものに関連する遺構の検出はかねませんでした。今は一本の糸に過ぎない調査成果も織り上げて行けば、国府や国府のまちの姿を再現できるものと考えております。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 22 年 12 月

前橋市教育委員会
教育長 佐藤博之



例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う元総社蒼海道路群（31）発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである

　　遺跡名　　元総社蒼海道路群（31）
　　調査場所　　群馬県前橋市元総社町1965ほか2筆
　　遺跡コード　　21 A 130 - 31
　　発掘調査期間　　平成22年1月18日～平成22年3月12日
　　調査担当者　　熊谷　演（技研測量設計株式会社）
　　整理・報告書作成期間　　平成22年8月5日～平成22年12月17日
　　整理担当者　　佐野良平（技研測量設計株式会社）

3 本書の編集は佐野が行った。原稿執筆はIを神宮　聰（前橋市教育委員会）、Vの一部を熊谷、他を佐野が担当した。

4 本書はデジタル編集・組版により作成し、その作業は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。

5 発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。

　　桃鹿正志（技研測量設計株式会社）
　　石川輝子　市村浩一　江幡三雄　木暮孝一　佐藤和彦　佐藤文江　杉山明夫　須藤香織　高山　愛　瀧澤佳子
　　角田耕二　長田友香　西渴　登　平井君江　福島様子　堀越晴子　三原一重　山下雅恵　湯浅澄子
　　横澤百合子　吉田文江　渡辺義雄
(以上、作業員・整理補助員)

6 遺物の分類・実測においては瀬田哲夫（湘南遺跡調査会）・中村岳彦・大川明子（以上、技研測量設計株式会社）の助力を得た。

7 本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

8 下記の諸氏、諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します（顔不同、敬称略）。

　　永井哲教　日沖剛史　株式会社研磨　山下工業株式会社

凡　　例

1 掘団中に使用した北は座標北である。

2 掘団に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』・『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 道構名称は、住居跡：H、道路状道構：A、溝：W、土坑：D、井戸跡：I、ビット：Pである。

4 道構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

　　道構　住居跡・土坑・ビット・・・1/60　竈・・・1/30　道路状道構・・・1/150　溝・・・1/150

　　全体図・・・1/200

　　遺物　土器・石製品・・・1/3、1/4　鉄製品・・・1/2　古錢・・・1/1

5 表中の計測値については（　）は現存値を表す。

6 道構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

　　道構図・・・・硬化面　■　焼土範囲　■
　　道物実測図・・・・須忠器（還元焰焼成）　■　釉薬　■

7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

　　As-B（浅間B軽石：1108年）、Hr-FP（椎名ニッ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、

　　Hr-FA（椎名ニッ岳洪川テフラ：6世紀初頭）、As-C（浅間C軽石：3世紀後葉～4世紀前半）





目 次

口絵1
口絵2
はじめに
例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	1
III	調査の方針と経過	5
1	調査範囲と基本方針	5
2	調査経過	5
IV	基本層序	5
V	遺構と遺物	7
1	堅穴住居跡	10
2	道路状遺構	10
3	溝	11
4	井戸・土坑・ピット	11
VI	まとめ	37
1	堅穴住居跡	37
2	蒼海城城壁跡	37

挿図目次

Fig 1	道路の位置	2
Fig 2	周辺道路図	5
Fig 3	基本層序	5
Fig 4	元紀村蒼海道路堅穴住居とグリッド設定図	6
Fig 5	調査区全休園	13
Fig 6	H-1～H-2号住居跡	14
Fig 7	H-3号住居跡	15
Fig 8	H-4号住居跡	16
Fig 9	H-5号住居跡、H-6号住居跡	17
Fig 10	H-6号住居跡、H-7号住居跡、D-19・20号土坑	18
Fig 11	H-7・8号住居跡、D-4・19・20号土坑	19
Fig 12	H-9・10号住居跡	20
Fig 13	H-11・12号住居跡	21
Fig 14	H-13・16号住居跡、D-25号土坑	22
Fig 15	A-1号道路状遺構	23
Fig 16	W-1号溝、I-1号井戸	24
Fig 17	W-2・5号溝	25
Fig 18	土坑	26
Fig 19	ピット群	27
Fig 20	H-1・4・5号住居跡出土遺物	28
Fig 21	H-5・7・11号住居跡出土遺物	29
Fig 22	H-12・15号住居跡、W-1・1・5号溝、D-11号土坑出土遺物	30
Fig 23	D-11・14・18・32号土坑出土遺物	31
Fig 24	D-32・33号土坑、遺構外出土遺物	32
Fig 25	遺構外出土遺物	33
Fig 26	蒼海城城壁図	38
Fig 27	元紀村蒼海道路群①周辺蒼海城想定図	41

表目次

Tab. 1	周辺道路概要一覧表	3
Tab. 2	井戸・土坑・ピット計測表	12
Tab. 3	出土遺物類別表	33
Tab. 4	蒼海城周辺年表	39
Tab. 5	蒼海城堅跡一覧表	40

写真図版目次

PL. 1	西側調査区全景、東側調査区全景	
PL. 2	H-1～5号住居跡	
PL. 3	H-6～10号住居跡	
PL. 4	H-11～16号住居跡、A-1号道路状遺構、W-1号溝	
PL. 5	W-1・2号溝、I-1号井戸、調査風景	
PL. 6	H-12・15号住居跡、W-1・5号溝、D-11・14・18・32号土坑出土遺物	
PL. 7	H-12・15号住居跡、W-1・5号溝、D-11・14・18・32号土坑出土遺物	
PL. 8	D-32・33号土坑、遺構外出土遺物	

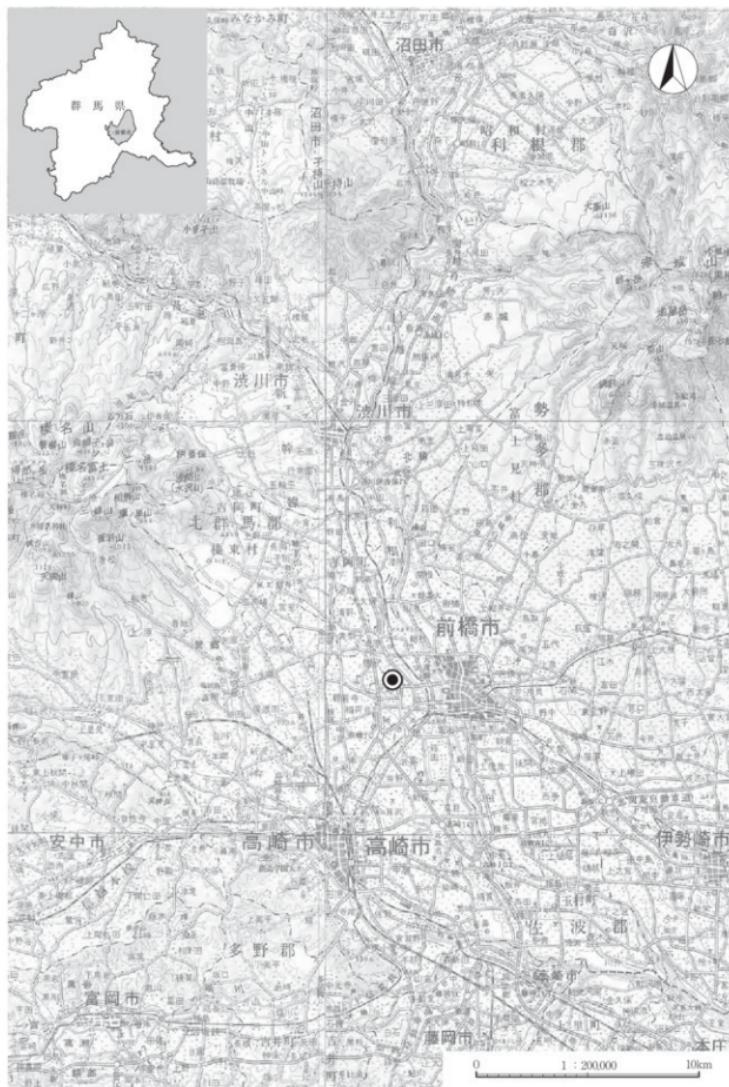


Fig. 1 遺跡の位置



I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、10年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成21年12月2日付けで前橋市長 高木政夫（区画整理第二課）より埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明（以下「調査団」という。）に発掘調査の実施について協議を行った。しかし、調査団では既に直営による発掘調査を実施しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、平成22年1月7日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結し、その後、1月14日付けで調査団と民間調査組織である技研測量設計株式会社 代表取締役社長 嶋田大和との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査を開始した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(31)」（遺跡コード：21A130-31）の「元総社蒼海」は区画整理事業名を採用し、数字の「(31)」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 本調査地は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約3kmの地点、前橋市元総社地内に所在し、西約0.7kmには関越自動車道が南北に、南には国道17号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、また東約0.5kmには市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。本調査地の立地する地形は、前橋台地上、櫻名山麓を源にする牛池川、染谷川が開析・形成した細長い微高地との比高3~5mを測る。遺跡が立地する台地上は主として桑畑などの畠地として利用されているが、本遺跡地の所在する位置は現在住宅地が立ち並ぶ中心地にある。

歴史的環境 本遺跡が立地する元総社地域には上野国府推定地や上野国分寺を中心に連続と遺跡が広がる地域である。周辺では関越自動車道建設や区画整理事業等に伴う発掘調査が行われており、多くの遺物・遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡の概要は以下の通りである。

縄文時代の遺跡は八幡川右岸の微高地に産業道路東【15】・産業道路西【16】・總社南泉明神北Ⅲ遺跡【61】、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域【22】・元総社小見三遺跡【59】・元総社蒼海遺跡群【24】などが挙げられ、堅穴住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡としては日高遺跡【18】・【19】、上野国分僧寺・尼寺中間地域【22】、正観寺遺跡【21】等があるがその分布は散漫である。

古墳時代になると本遺跡周辺の区域は県内でも中心的な地域であったことが窺われる。それを示すものとして總社古墳群が挙げられ、古墳時代後期・終末期に至り、王山古墳【7】・二子山古墳【12】・愛宕山古墳【10】・宝塔山古墳【13】・蛇穴山古墳【8】等の首長墓が多数築造された。

奈良・平安時代に至ると、本遺跡周辺は上野国府・国分寺【2】・国分尼寺【3】・山王庵寺【4】の建設に示されるように古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域におよそ900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡【14】・元総社寺田遺跡【43】・元総社宅地遺跡【55】などがある。また元総社明神遺跡【24】では南北方向の溝跡、関泉橋遺跡【25】では東西方向の大溝が確認され、国府域の東外郭線が想定された。

国分寺は昭和55年以降の調査により、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認されている。国分尼寺は昭和44・45年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年の前橋市埋蔵文化財発掘調査団の確認調査により、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。関連遺跡として中尾遺跡【17】、

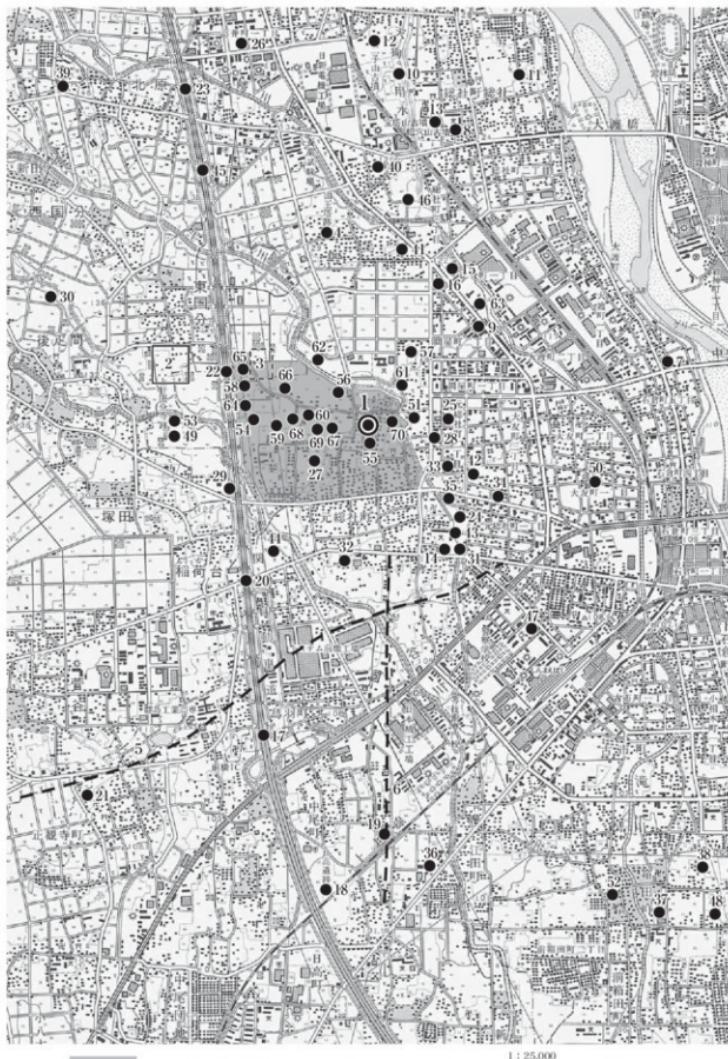


Fig. 2 周辺遭跡図



鳥羽遺跡〔20〕、上野国分寺跡・尼寺中間地域〔22〕などが挙げられる。

山王庵寺は昭和3年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和49～56年にかけて7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」箇書の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また平成9～11年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成18・19年の調査では北・東・西面の回廊を検出している。

また本遺跡の南約1.5kmにはN-64°E方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡〔19〕では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡や、南宋～元時代の青白磁梅瓶が出土している。また本遺跡周辺には屋敷に囲まれた城館跡が数多く認められる。

天正年間以降は源氏・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、秋元氏が総社城に移ると同時に蒼海城は廢城となつた。

Tab.1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺跡・出土物
1	元村井作海跡（山王庵寺）	2009	平安
2	上野國守令跡（佐野委）	1980～88	奈良・金剛三層塔・須弥壇
3	上野國守令跡	1999	奈良・西ノ瀬・東ノ瀬・須弥壇
4	山ノ上碑	1974	奈良・山ノ上碑・鐵塔石・金光明塔・通鑑塔・御印塔
5	東山道（東山道）	—	—
6	日高道（東山道）	—	—
7	日高道	1972	古墳・扇形埴輪門（丸と中）
8	扇形埴輪門	1973	古墳・古墳（丸と中）
9	扇形埴輪門	1998	古墳・古墳（丸と中）
10	扇形埴輪門	1999	古墳・古墳（丸と中）
11	扇形埴輪門	—	古墳・扇形埴輪門（丸と中）
12	扇形二子古墳	未調査	古墳・古墳（丸と中）
13	宝鏡山の古墳	未調査	古墳・古墳（丸と中）
14	元村井小村村役場遺跡	1962	平安・扇形埴輪物・柱立器・削葉物
15	扇形埴輪物	1966	鏡文・柱立器
16	扇形埴輪物	—	鏡文・柱立器
17	中村遺跡（事務所）	1976	奈良・平安・柱立器
18	中村遺跡（事務所）	1977	古生・水井跡・方切溝遺跡・柱立器・削葉物
19	古生遺跡（西ノ瀬）	1970	古生・古墳
20	古生遺跡（事務所）	1979～83	古墳・柱立器・削葉物・也直・平安・柱立器・扇形埴輪物（仲野跡）
21	扇形埴輪（一都・高馬跡）	1979～81	古生・柱立器・古墳・柱立器・也直・平安・柱立器・扇形埴輪・中直・鏡文・鏡
22	上野國守令跡（山ノ上碑跡）	1980～83	奈良・平安・柱立器・削葉物・也直・平安・柱立器・扇形埴輪・中直・鏡文・鏡
23	北足利通（佐野町）	1982	鏡文・土器・扇形埴輪・古墳・也直・平安・柱立器・扇形埴輪・中直・鏡文・鏡
24	北足利通（佐野町）	1982～96	古墳・扇形埴輪・古墳・也直・平安・柱立器・扇形埴輪・中直・柱立器・鏡文
25	扇形埴輪	1983	古生・扇形埴輪
26	扇形埴輪（中直跡）	1984	古生・扇形埴輪・中直・扇形埴輪・中直・鏡文
27	扇形埴輪	1984	古生・扇形埴輪・平安・柱立器・中直・削叶器
28	扇形埴輪	1985	古生・扇形埴輪・中直・平安・削葉物
29	扇形埴輪（佐野町）	1985	古生・扇形埴輪
30	扇形埴輪（一都・高馬跡）	1985～87	古墳・柱立器・奈良・平安・柱立器・中直・削葉物・也直・古墳・削葉物
31	寺内遺跡	1986	平安・削葉物
32	大河原遺跡（土塁跡）	1986, 88	奈良・平安・扇形埴輪
33	大河原遺跡（土塁跡）	1986, 95	古墳・柱立器・平安・柱立器・中直・削葉物・石動遺跡
34	扇形埴輪	1987	奈良・平安・柱立器・削葉物
35	大河原遺跡（扇形埴輪）	1987	古墳・柱立器・平安・柱立器・通鑑・施丁式土塁
36	扇形埴輪	1987	平安・古生
37	村吉遺跡	1987	平安・土器
38	大河原遺跡	1987	平安・大河原
39	扇形埴輪	1988	鏡文・柱立器・平安・柱立器・削葉物
40	村吉遺跡	1988	古墳・柱立器・削葉物・也直・平安・柱立器・中直・削葉物
41	古生寺跡（山ノ上碑跡）	1988	古生・平安・柱立器
42	扇形埴輪	1988	平安・扇形埴輪
43	扇形埴輪（中直跡）	1988～91	古墳・柱立器・削葉物・也直・平安・柱立器・中直・削葉物
44	扇形埴輪（中直跡）	1989	古生・扇形埴輪
45	扇形埴輪（扇形出土）	1990	古墳・柱立器・也直・平安・扇形埴輪
46	扇形埴輪	1991	古生・扇形埴輪・中直・平安・扇形埴輪
47	扇形埴輪（佐野町）	1991	古生・扇形埴輪・古墳・柱立器・削葉物・也直・中直・土塁基
48	扇形埴輪	1995	鏡文・古生
49	上野四分半多面鏡	1996	古墳・柱立器・平安・柱立器



番号	遺跡名	調査年度	時代・主な遺物・出土遺物
50	人丸史跡遺跡	1998	平安・光明期
51	越前国守御所跡遺跡	1999	六朝・高麗・北朝時・唐鏡、中世・通鏡
52	越前國西ノ垂跡	1999	六朝・漢式壺、平安・光明期・輪孔瓦罐類・漢、近鉄法隆寺
53	元寇社西ノ垂跡（季要辯）	2000	六朝・白質器、青瓷、白瓦、日笠形・輪孔瓦罐類・漢、近鉄法隆寺
54	元寇社小見跡	2000	平安・白質器、青瓷、白瓦、日笠形・輪孔瓦罐類・漢、近鉄法隆寺
55	元寇社毛鬼塚（1～2回）レント	2000	六朝・白質器、青瓷、白瓦、日笠形・輪孔瓦罐類・輪孔瓦罐
56	元寇社小内宮遺跡	2001	六朝・白質器、青瓷、白瓦・平安・日笠形・輪孔瓦罐類・漢、近鉄法隆寺
57	越前守松和守室大造西遺跡	2001	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・白瓦・柱頭・須弥・近鉄法隆寺
58	越前守松和守室大造西遺跡	2001	古墳・柱頭・須弥・中世・白瓦・柱頭・須弥・近鉄法隆寺
59	元寇社毛鬼塚	2001	平安・白質器、青瓷、白瓦・日笠形・輪孔瓦罐類・輪孔瓦罐
60	元寇社小見跡	2001	平安・白質器、青瓷、白瓦・日笠形・輪孔瓦罐類・輪孔瓦罐
61	元寇社小見跡	2001	平安・白質器、青瓷、白瓦・日笠形・輪孔瓦罐類・輪孔瓦罐
62	元寇社毛鬼塚（季要辯）	2002～04	六朝・木構材、奈良・平安・柱頭・須弥・小柱・輪孔瓦罐類・木構材・火葬墓
63	精萬堂遺跡遺跡（季要辯）	2002	六朝・白質器、青瓷、白瓦・平安・柱頭・須弥・精萬堂・輪孔瓦罐類・井戸跡
64	元寇社小見跡	2002	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・須弥・漢
65	元寇社小見跡	2002	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・須弥・漢
66	元寇社小内宮遺跡	2003	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・竹筒器
67	元寇社小内宮遺跡	2003	六朝・白質器、奈良・平安・柱頭・須弥・輪孔瓦罐類・中世・白瓦・通鏡
68	元寇社小見跡	2004	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・須弥
69	元寇社小見跡	2004	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡
70	元寇社小内宮遺跡	2004	六朝・高麗・奈良・平安・柱頭・輪孔・輪孔瓦罐類・中世・通鏡
71	元寇社小見跡（1）	2004	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・輪孔・上層墓
72	元寇社小見跡（2）	2005	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡・上層墓
73	元寇社小見跡（3）～（4）元寇社小見跡遺跡	2005	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭
74	元寇社小見跡（5）	2005	平安・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭
75	元寇社小見跡（6）	2005	六朝・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡・上層墓
76	元寇社小見跡（7）	2005	奈良・平安・柱頭・須弥
77	元寇社小見跡（8）	2006	平安・平安・柱頭
78	元寇社小見跡（9）～（10）	2006	平安・壁穴付切妻形・内壁・壁穴付切妻・奈良・平安・壁穴付切妻・輪孔瓦罐類・通鏡・土器・手斧・漆器
79	元寇社小見跡（11）	2006	六朝・白質器、奈良・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡
80	元寇社小見跡（12）	2006	六朝・白質器、奈良・平安・柱頭・須弥・中世・月印鏡
81	元寇社小見跡（13）	2008	平安・白質器、青瓷・日笠形・奈良・平安・柱頭・玉筋綱小・須弥・中世・通鏡・上層墓
82	元寇社小見跡（14）	2008	六朝・白質器、青瓷・日笠形・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世・通鏡
83	元寇社小見跡（15）	2008	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡
84	元寇社小見跡（16）	2008	奈良・平安・柱頭・須弥・中世・通鏡
85	元寇社小見跡（17）	2008	六朝・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世以前・上層墓・井戸跡・不明・柱頭・須弥
86	元寇社小見跡（18）	2008	平安・柱頭
87	元寇社小見跡（19）	2008	六朝・平安・柱頭・須弥・中世・青釉器
88	元寇社小見跡（20）	2008	六朝・平安・柱頭・須弥・日笠形・輪孔瓦罐類・通鏡・中世・上層墓・通鏡
89	元寇社小見跡（21）	2008	平安・柱頭・須弥・中世・通鏡
90	元寇社小見跡（22）	2008	六朝・白質器、奈良・平安・柱頭
91	元寇社小見跡（23）	2008	六朝・白質器、奈良・上向・中世・青釉器の断面
92	元寇社小見跡（24）	2008	平安・白質器、青瓷・日笠形・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世・通鏡
93	元寇社小見跡（25）	2008	平安・白質器、青瓷・日笠形・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世・通鏡
94	元寇社小見跡（26）	2008	平安・白質器、青瓷・日笠形・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世・通鏡
95	元寇社小見跡（27）	2008	六朝・白質器、青瓷・日笠形・輪孔・奈良・平安・柱頭・輪孔瓦罐類・中世以前・上層墓・井戸跡・不明・柱頭・須弥

参考文献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2000 「元寇社小見迹」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2001 「元寇社小内宮遺跡」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2002 「元寇社小見跡遺跡」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2002 「元寇社小見跡遺跡・元寇社草作V遺跡」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2003 「元寇社小内宮遺跡」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2003 「元寇社小内宮遺跡・鶴林寺境内別拝所V遺跡」
 前橋市埋蔵文化財発掘調査会団 2005 「元寇社小内宮遺跡・鶴林寺境内別拝所V遺跡」





世界測地系 X = +43754.9068 Y = -71691.7621

発掘調査は調査区内に排土置き場設置の関係上、調査区を西・東に二分割し西側から調査を開始、調査終了後西側調査区を埋め戻し東側調査区へ移行した。表土掘削は試掘調査の結果をふまえ遺構確認面まで重機（0.25 パックホー）で掘削を行った。遺構の確認・掘削は発掘作業員により移植コテ・鍬籠などで慎重に行われた。遺構調査に関しては土層の堆積状況を確認するために土層ベルトを住居跡は主軸方向、土坑・ピット等は長軸方向を基本として設定した。住居跡の遺物に関しては床面直上や住居跡に伴うものは No 遺物とし、覆土中の破片は一括遺物として取り上げた。

遺構固化については空中写真測量と電子平板を用いて平面図・断面図の測量、編集を行った。断面図についてはオルソフォトに変換して編集を行った。遺構の記録写真については35mmカラーフィルム・リバーサルフィルム・デジタルカメラの3種類を用いて担当者が撮影、遺跡全体に対してはラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施した。

2 調査経過

本遺跡の発掘調査は平成22年1月18日から3月12日まで実施した。調査経過の概略は以下のとおりである。

1月18日 西側調査区表土掘削開始。 2月15日 西側調査区埋め戻し。 3月3日 東側満査区全景撮影・測量。

1月22日 遺構調査開始。 2月18日 東側調査区表土掘削開始。 3月8日 東側調査区埋め戻し。

2月10日 西側調査区全貌撮影・測量。 2月22日 遺構調査開始。 3月12日 発掘調査の全工程を終了する。

IV 基本眉月

平垣跡は平地川の南北段丘上に立地している。調査区内は南へと緩やかに傾斜しているが堆積状況に大きな差異が認められないため、比較的良好な状態が見られるW-1号溝の掘り込みを利用して基本層序として観察した。

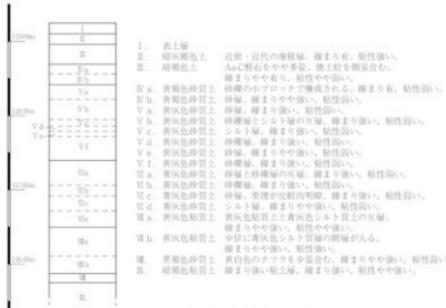


Fig. 3 基本層序

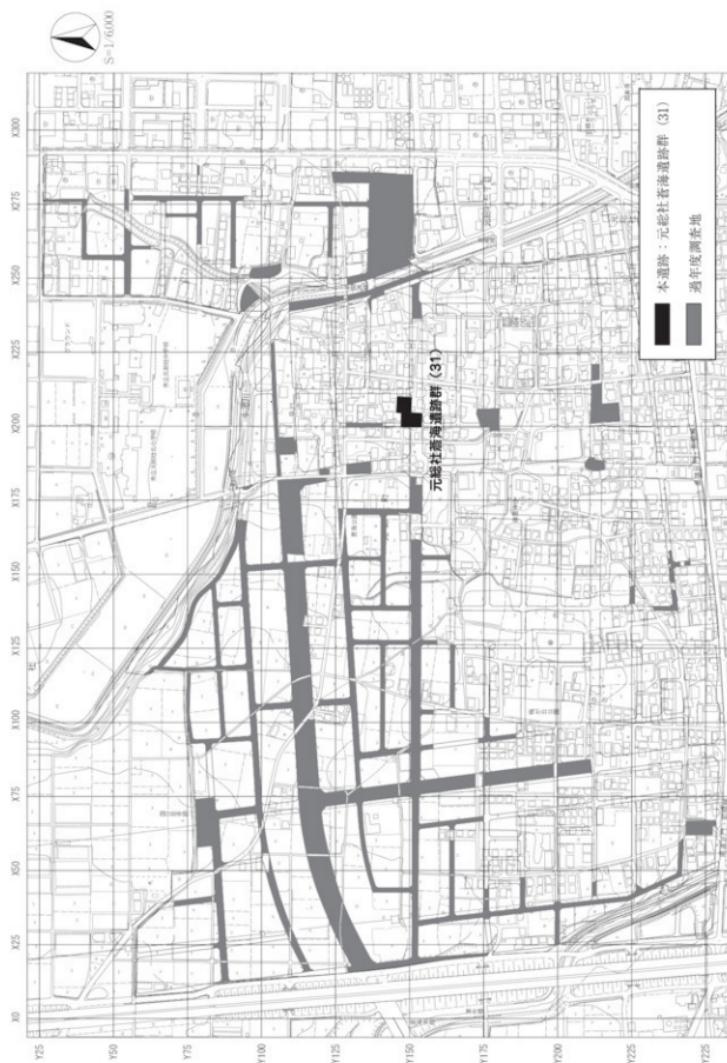


Fig.4 元総社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図



V 遺構と遺物

1 壊穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 6・20、PL 2・6)

位置 X201、Y153・154 主軸方向 N-76°-E 規模 東西軸 (286) m、南北軸 (1.17) m、壁現高 0.18m。住居跡範囲の大部分が調査区外。面積 (1.33) m² 床面 地山硬化床。比較的平坦で部分的に硬化面が確認できる。竈 検出されず。出土遺物 北東部床面上直上で正位2枚重ねの壺(1・2)と甕(3)を出土。(3)は胎土中に石英・片岩などの小礫がやや多く混じる。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期(6世紀後半～7世紀前半)と想定される。

H-2号住居跡 (Fig. 6、PL 2)

位置 X201、Y153 主軸方向 不明。硬化面範囲 長軸 2.22 m、短軸 1.89 m。面積 不明 壁面 確認時点で床面が露出しているため部分的に残存も同化しきなかった。床面 暗褐色土・As-Cをやや多く含む貼床土。若干被熱し部分的に焼上化する。平坦。重複 H-3、W-5と重複しており、新旧関係はH-3→W-5→本遺構である。出土遺物 覆土中から土師器小片を出土。時期 重複関係からH-3(古墳時代後期)以降と想定される。備考 床上面まで後世の削平を受けているため、床面硬化面範囲のみの検出となった。

H-3号住居跡 (Fig. 6、PL 2)

位置 X200・201、Y152・153 主軸方向 N-3°-E 規模 南北軸 (5.69) m、東西軸 (5.16) m、壁現高 9 cm。南部は上面からの削平により消失。面積 (17.88) m² 床面 地山硬化床。比較的平坦、北西部にのみ硬化面がみられる。壁面 北面及び東面の一部のみ浅い立ち上がり。他所は上面からの削平により消失。竈 検出されず。状況から北あるいは東壁面に位置すると想定されるが、W-5・上面からの削平によって消失。重複 H-2、W-5、I-1と重複しており、新旧関係は本遺構→W-5→H-2・I-1である。出土遺物 覆土中から土師器小片を出土。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期(6世紀後半～7世紀前半)と想定される。備考 掘り方時にピットを3基検出。

H-4号住居跡 (Fig. 7・20、PL 2・6)

位置 X202・203、Y152・153 主軸方向 N-23°-E 規模 南北軸 7.64 m、東西軸 (7.14) m、壁現高 0.40m。東端部はW-2によって消失。面積 (33.22) m² 床面 地山硬化床。比較的平坦で中央部に硬化面が広がる。北・西・南壁付近の一部には浅い掘り込みに貼床が施されている。竈 検出されず。状況から東壁面に位置すると想定。壁周溝 北西部に部分的に残存。浅い掘り込み。主柱穴 3基。深さはP1: 0.61 m、P2: 0.57 m、P3: 0.55 m、穴间距は3.80～3.99 mを測る。重複 H-4、W-2と重複しており、新旧関係は本遺構→H-4、W-2である。出土遺物 須恵器壺(1)、土師器壺(2～6)、土師器高壺(7)を図示。(2・3)は床面上直上の出土。時期 重複関係・出土遺物の傾向から古墳時代後期(6世紀後半～7世紀前半)と想定。備考 中央部や東側に床下土坑を確認。

H-5号住居跡 (Fig. 8・9・20・21、PL 2・6)

位置 X201・202、Y150・151 主軸方向 N-90°-E 規模 東西軸 5.21 m、南北軸 4.88 m、壁現高 0.44m。面積 18.81 m² 壁面 北・西壁の一部はH-6と共通。床面 中央部から北西部にかけて(H-6)の大部分に貼床が施されている。東・南壁付近では地山硬化床。比較的平坦で竈周辺では硬化が顕著。竈 東壁面中央部に位置。確認長 0.84 m、燃焼部幅 0.71 m。天井部は完全に崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用している。燃焼部底面と煙道部へと立ち上がる壁面は被熱で焼土化。燃焼部から煙道へは平垣に近い傾斜角であり、奥壁で急傾斜に立ち上がる。袖は両側とも崩落しており範囲が確認できるのみである。残



存長は右袖 0.50 m、左袖 0.39 m。壁周溝 ほぼ全周を巡り、断面逆台形を呈する。H-6 の壁周溝を一部踏襲している可能性が高い。床面からの深さは 7 ~ 8 cm。貯蔵穴 南東部に位置し、平面円形を呈する。深さは 0.58 m。主柱穴 4 基。深さは P1 : 0.50 m、P2 : 0.40 m、P3 : 0.20 m、P4 : 0.44 m、柱穴間は 277 ~ 285 m を測る。重複 H-4・6、A-1 と重複しており、新旧関係は H-4・6 → 本遺構 → A-1 である。出土遺物 床面直上から須恵器蓋（1）、土師器坏（2~6）、覆土中から土師器坏（7~8）が出土。こも礎石は住居跡南西壁際の床面直上から列状を成して確認された。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と想定される。

H-6号住居跡 (Fig. 9・10, PL 3)

位置 X201・202、Y150・151 主軸方向 N-90°-E 規模 東西軸 4.32 m、南北軸 4.04 m、壁現高 0.43 m。上面は H-5 築造時に削平され貼床が施されている。やや小型の住居跡である。面積 13.07 m² 床面 地山硬化床。比較的平坦である。竈 東壁面に位置。確認長 0.72 m、燃焼部幅 0.48 m。H-5 貼床下から確認。構築材として黒褐色の粘質土を使用。燃焼部底面は被熱し部分的に若干焼土化している。燃焼部は若干凹み、煙道部へ向かってやや急傾斜に立ち上がる。袖は両側とも崩落し僅かに残存、右袖には心材（凝灰岩切石）が露出している。残存長は右袖 0.54 m、左袖 0.32 m。壁周溝 ほぼ全周を巡り、断面逆台形を呈する。床面からの深さは 7 cm 前後。貯蔵穴 南東隅に位置し、平面円形を呈する。深さは 0.38 m 主柱穴 4 基。深さは P1 : 0.39 m、P2 : 0.49 m、P3 : 0.37 m、P4 : 0.23 m、柱穴間は 1.80 ~ 1.85 m を測る。重複 H-5 と重複しており、新旧関係は本遺構 → H-5 である。出土遺物 極小であり、図示しない。時期 判然としないが、重複関係・竈を有することから古墳時代中～後期と想定。備考 H-5 壁面・壁周溝の一部が H-6 のそれを踏襲している可能性があることから、H-6 から H-5 への住居域抵張も想定するべきであろう。

H-7号住居跡 (Fig.10・11・21, PL 3・6)

位置 X201・202、Y148～150 主軸方向 N-59°-E 規模 南北軸 5.73 m、東西軸 5.64 m、壁現高 0.51 m。面積 (23.95) m² 床面 地山硬化床。比較的平坦、部分的に搅乱を受け消失。竈 西壁面やや南側に位置。確認長 0.98 m、燃焼部幅 (0.83) m。天井部は崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用。焚口付近の底面が被熱し焼土化している。燃焼部から煙道にかけては緩やかに傾斜する。また燃焼部内底面には支脚が設置されていた穴が確認されたが、支脚と考えられる遺物は確認されていない。袖は右側が後世の削平により消失、左側は心材の凝灰岩切石が残存する。燃焼部には焚口天井に配されたと考えられる凝灰岩切石が崩落している。壁周溝 北・南壁際に部分的に残存。床面からの深さは 7 cm 前後。貯蔵穴 南西隅に位置し、平面方形を呈する。深さは 0.54 m 主柱穴 4 基。深さは P1 : 0.67 m、P2 : 0.63 m、P3 : 0.68 m、P4 : 0.64 m、柱穴間は 2.35 ~ 3.01 m を測る。出土遺物 覆土中から土師器、須恵器が出土しているが少ない。須恵器瓶（1）、土師器坏（2）、土師器壺（3）を図示。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と想定。

H-8号住居跡 (Fig.11・21, PL 3・6)

位置 X200・201、Y147・148 主軸方向 N-27°-E 規模 東西軸 5.62 m、南北軸 (3.64) m、壁現高 0.24 m。北半部を W-1 によって消失。面積 (9.04) m² 壁面 確認時点で床面が露出しているため部分的に残存。床面 西部は地山硬化床。比較的平坦で東部は倒木痕の搅拌土。竈 検出されず。状況から北あるいは東壁面に位置すると想定。壁周溝 南～東壁に残存。西壁際にも部分的にみられる。主柱穴 2 基。深さは P1 : 0.80 m、P2 : 0.66 m、柱穴間は 3.00 m を測る。重複 W-1 と重複しており、新旧関係は本遺構 → W-1 である。出土遺物 覆土中から土師器が出土しているが少ない。土師器高坏（1）を図示。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と想定。



H-9号住居跡 (Fig.12・21, PL 3・6)

位置 X205・206, Y147・148 主軸方向 N-16°-E 規模 東西軸 3.58 m、南北軸 (1.12) m、壁現高 0.20m。北半部をW-1と搅乱によって消失。面積 (2.20) m² 床面 地山硬化床。比較的の平坦で一部倒木痕の搅拌土がみられる。竈 検出されず。主柱穴 2基。深さはP1: 0.29 m, P2: 0.30 m。重複 W-1と重複しており、新旧関係は本遺構→W-1である。出土遺物 覆土から土師器 (1~3)・須恵器が少量出土している。時期 出土遺物の傾向から7世紀前半と想定される。

H-10号住居跡 (Fig.12・21, PL 3・6)

位置 X205・206, Y149・150 主軸方向 N-21°-E 規模 東西軸 5.19 m、南北軸 4.47 m、壁現高 0.23m。全体的に後代の遺構、搅乱を受けている。南西部は上面からの削平で消失。面積 (12.76) m² 床面 地山硬化床。硬化面範囲は捉えきれず。比較的の平坦。竈 東壁面中央部に位置。確認長 1.12 m、燃焼部幅 0.49 m。天井部は崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用。燃焼部底面が被熱し若干焼土化している。燃焼部から櫛道にかけては緩やかに傾斜し、奥壁ではP-51によって削平されているものの急傾斜に立ち上がると考えられる。袖は左袖がやや崩落し右袖は心材の石が確認できる。左袖と比較して若干ではあるが良好に残存する。共に灰白色の粘質土で構築されている。残存長は右袖 0.58 m、左袖 0.46 m。焚口手前には心材として使用されていたであろう石材が散乱しており、竈の破壊行為が行われたことが窺える。壁周溝 北東隅に残存する。床面からの深さは6 cm前後。貯藏穴 南東隅に位置し、平面円形を呈する。深さ 0.80 m。主柱穴 3基。深さはP1: 0.45 m, P2: 0.38 m, P3: 0.43 m。柱穴間は 2.07 ~ 2.24 m を測る。住居内施設 中央部に床下土坑 (D1) 1基。出土遺物 覆土から繩文土器、須恵器蓋 (1)・高坏 (2)・土師器坏 (3・4)・土錘 (5) が出土。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期 (6世紀後半~7世紀前半)と想定。

H-11号住居跡 (Fig.13・21, PL 4・6)

位置 X205・206, Y150 主軸方向 N-16°-E 規模 東西軸 5.27 m、南北軸 (3.35) m、壁現高 0.21m。西側はW-4・上面からの削平により消失、南半部は調査区外。面積 (9.08) m² 床面 地山硬化床。比較的の平坦。竈 検出されず。南東隅のピット覆土に焼土粒がみられるため東壁面に位置する可能性がある。壁周溝 北・東壁間に残存する。主柱穴 2基。深さはP1: 0.46 m, P2: 0.48 m、柱穴間は 2.22 m を測る。住居内施設 P3~7は性格不明。重複 H-14・A-1・W-4と重複しており、新旧関係は本遺構→H-14→A-1・W-4である。出土遺物 覆土から土師器・須恵器が出土している。須恵器高坏 (1)・土師器坏 (2・3) を図示。時期 出土遺物の傾向から7世紀と想定。

H-12号住居跡 (Fig.13・22, PL 4・6・7)

位置 X206・207, Y148・149 主軸方向 N-24°-E 規模 東西軸 4.88 m、南北軸 4.81 m、壁現高 0.31m。北端部をW-1、南東部をW-4によって消失。面積 (16.20) m² 床面 地山硬化床。比較的の平坦で中央部での硬化が顕著。竈 検出されず。東壁面に位置すると想定。壁周溝 西・南壁間に部分的に残存する。床面からの深さは3 cm前後。主柱穴 4基。深さはP1: 0.24 m, P2: 0.45 m, P3: 0.29 m, P4: 0.31 m、柱穴間は 2.07 ~ 2.13 m を測る。土坑 1基。貯藏穴の可能性も考えられるが平面不整形で判然としない印象を受ける。重複 H-13・W-1・4と重複しており、新旧関係はH-13→本遺構→W-1・4である。出土遺物 須恵器蓋 (1)・土師器坏 (2~6)・甌 (7・9)・瓶 (8) が出土。(2・9)は床面直上からの出土。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期 (6世紀後半~7世紀前半)と想定される。

H-13号住居跡 (Fig.14, PL 4)

位置 X206・207, Y148 主軸方向 N-31°-E 規模 東西軸 (5.58) m、南北軸 (3.53) m、壁現高 0.14m。北半部をW-1によって消失。面積 (8.36) m² 床面 南半部では地山硬化床、北半部では暗褐色土を含んだ貼床が施されている。比較的の平坦。北端部では極端に下がり段状になるため別遺構・W-1の可



能性も考えられる。竪 検出されず。壁周溝 ほぼ全周を巡るが2cm前後と浅い。主柱穴 2基。深さはP1:0.56m、P2:0.63m。土層観察からP2→P1への柱の据え換えが行われたと考えられる。重複 H-12、W-1と重複しており、新旧関係は本遺構→H-12→W-1である。出土遺物 遺物少量のため図示し得なかった。時期 判然としないが、重複関係から古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と想定。

H-14号住居跡 (Fig.14、PL 4)

位置 X207、Y150 主軸方向 N-24°-E 規模 東西軸(2.10)m、南北軸(1.11)m、壁現高0.14m。大部分が調査区外。面積 (0.87)m² 床面 明確な硬化面は認められないが、調査区壁の土層観察では暗褐色の貼床が確認できる。比較的平坦である。竪 検出されず。主柱穴 1基。深さは0.49m。重複 H-11、A-1と重複しており、新旧関係はH-11→本遺構→A-1である。出土遺物 覆土中から土師器小片が出土しているが少量。時期 調査範囲が狭く、出土遺物も少ないため判然としない。

H-15号住居跡 (Fig.14・22、PL 4・7)

位置 X208・209、Y150 主軸方向 N-18°-E 規模 東西軸(3.02)m、南北軸(1.35)m、壁現高0.08m。大部分が調査区外。面積 (1.37)m² 床面 地山硬化床。比較的平坦である。竪 検出されていないが調査区断面において焼土ブロック（2層土）が確認できることから東壁に想定される。壁周溝 北東隅に残存。床面からの深さは2～3cm。主柱穴 1基。深さは0.18m。出土遺物 覆土中から土師器壺(1)、柱穴埋土から土師器壺（長胴壺）小片が出土。時期 出土遺物の傾向から古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と想定。

H-16号住居跡 (Fig.14、PL 4)

位置 X208・209、Y149・150 主軸方向 N-24°-E 規模 東西軸(2.82)m、南北軸(2.74)m、壁現高0.02m。南半部はW-5によって消失、東半部は調査区外。面積 (4.56)m² 床面 大部分が地山硬化床。北壁付近の一部で貼床が認められる。比較的平坦。竪 検出されず。壁周溝 北・西壁際で確認。床面からの深さは5cm前後。主柱穴 2基。深さはP1:0.54m、P2:0.32m。柱穴間は1.54mを測る。重複 A-1と重複しており、新旧関係は本遺構→A-1である。出土遺物 遺物少量のため図示し得なかった。時期 出土遺物が少なく判然としないため不明。

2 道路状遺構

A-1号道路状遺構 (Fig.15、PL 4)

位置 X201～209、Y150 走行方向 N-88°-E 規模 長さ(32.61)m 最大幅2.00m 形状等 約1.70m幅で東西方向へほぼ直線的に伸びる。W-2～4間は上面からの削平により確認できず。断面浅いU字状を呈する。硬化面 部分的に散在するが、西側では掘り込みを確認できるものの顕著な硬化面は検出されなかつた。基盤層となる底面もやや硬化している様子が窺える。重複 H-10・11、W-2・4と重複しており、新旧関係はH-10・13→本遺構→W-2・4である。出土遺物 覆土中より土師器壺を出土。小片のため図示し得なかつた。時期 出土遺物が少なく判然としないため不明。

3 溝

W-1号溝 (Fig.16・22、PL 4・5・7)

位置 X 199～209、Y 146～148 主軸方向 N-85°-W 規模 長さ(38.5)m W-1a:最大幅 上幅4.00m、下幅0.52m 深さ3.18m W-1b:最大幅 上幅(1.52)m、下幅(0.61)m 深さ2.86m W-1c:最大幅 上幅(0.81)m、下幅 未確認 深さ(3.81)m 形状等 調査区北端部で東西方向へ直線的に走行。覆土断面観察から3時期の堀跡を確認、c→b→aの順で造り替えられたと考えられる。堀の形状はW-1a・



bが箱蓋研堀、cは底面の確認に至らないため不明。底面はW-1 aが平坦、W-1 bは浅いU字状、共に湛水の痕跡は確認できない。出土遺物 本遺構の時期に帰属すると考えられる遺物は皆無である。江戸時代後期以降に埋没したと考えられる覆土上層（1～5層土）よりかわらけ（1）、陶器（2）、焰烙（3）、擂鉢（4）、壺（5）、五輪塔（6）が出土している。時期 3時期の堀跡が造り替えられた時期を示す文献・遺物は今のところ確認されていない。少なくとも蒼海城が機能していた時期（15～17世紀前半）に帰属する。備考 蒼海城の堀跡と考えられる。近隣住民の話によると昭和初期頃までは浅い灌み状に堀跡が確認できたという。

W-2号溝 (Fig.17, PL 5)

位置 X 203・204、Y 149～154 主軸方向 N-7°-E 規模 長さ（20.64）m 最大幅 上幅4.02 m、下幅1.07 m 深さ 1.44 m 形状等 調査区南北方向に直線的に走行し、中央部にて止まる。断面逆台形の箱掘で底面は平坦である。湛水の痕跡は確認できない。出土遺物 覆土中より土師器・須恵器・陶器の小片が少量出土。大部分が混入したものと考えられる。時期 蒼海城が機能していた時期（15～17世紀前半）と想定される。

備考 W-1とは垂直方向の関係にあり、覆土も共通する点が多い。蒼海城の郭内の堀跡か。

W-3号溝 (Fig.17)

位置 X 200・201、Y 151 主軸方向 N-89°-W 規模 長さ 5.4 m 最大幅 上幅 0.62 m、下幅 43.6 m 深さ 0.19 m 形状等 東西方向に走行する細くて浅い溝。断面逆台形、底面は比較的平坦。重複 W-5、I-1と重複しており、新旧関係は本遺構→W-5→I-1である。出土遺物 覆土中から土師器・火鉢等の小片が出土。時期 覆土の状況から近世以降と考えられる。

W-4号溝 (Fig.17)

位置 X 206～208、Y 148～150 主軸方向 N-38°-E 規模 長さ（12.72）m 最大幅 上幅 1.42 m、下幅 0.93 m 深さ 0.43 m 形状 南西～北東方向に直線的に走行。断面逆台形、底面は比較的平坦。出土遺物 覆土中から陶器小片が出土。時期 出土遺物・覆土の状況から近世以降と考えられる。

W-5号溝 (Fig.17・22, PL 7)

位置 X 200・201、Y 150～154 主軸方向 N-2°-W 規模 長さ（13.87）m 最大幅 上幅 2.06 m、下幅 0.99 m 深さ 0.33 m 形状 南北方向に直線的に走行。断面逆台形、底面は比較的平坦。出土遺物 覆土中からかわらけ（1）、陶器小片が出土。時期 出土遺物・覆土の状況から中近世以降と考えられる。

4 井戸・土坑・ピット (Fig.10・11・14・16・18・19・22～24, PL 5・7・8)

検出された土坑の内、D-10・11・13・14・16・20・21・28・29・31・32・33は土壤幕の可能性が高く、調査時に桶を据えたような円形の筋状痕跡がみられるものもあった。形状はほぼ全てが円形でD-14のみ長方形である。人骨の出土は無かったがD-11・14・32・33からは埋納された古銭・陶磁器類が出土している。古銭・陶磁器類の時期から18～19世紀に帰属すると考えられる。

井戸・土坑・ピットの計測値については Tab. 2 井戸・土坑・ピット計測表を参考のこと。



Tab.2 井戸・土坑・ピット計測表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	形状	出土遺物	備考
I - 1	X200, Y151 - 152	093	0.88	(0.61)	円形		
D - 1	X199, Y148 - 149	321	1.29	0.13	不整形		
D - 2	X200, Y148	118	0.82	0.11	長方形		
D - 3	X200, Y148	114	0.78	0.08	椭円形		
D - 4	X200, Y148	142	0.96	0.20	不整形		
D - 5	X200, Y150	222	1.21	0.10	長方形		
D - 6	X199 - 200, Y153	(0.92)	0.42	0.26	不明		
D - 10	X202, Y153	133	1.28	0.45	円形		土壤基か。
D - 11	X202, Y152	090	0.90	0.28	円形	陶磁器・古銭	土壤基か。
D - 13	X202, Y153	086	0.80	0.30	円形		土壤基か。
D - 14	X200 - 201, Y149 - 150	230	1.53	0.75	長方形	磁器・小刀・土製模造貨・古銭	土壤基か。
D - 16	X202, Y153	112	1.16	0.45	円形		土壤基か。
D - 17	X202, Y148	220	1.68	0.56	長方形		
D - 18	X200 - 201, Y149	(2.58)	1.86	0.14	長方形	土師器坏	
D - 19	X201 - 202, Y148	151	1.02	0.45	長方形		
D - 20	X201 - 202, Y148 - 149	129	1.19	0.22	円形		土壤基か。
D - 21	X202, Y148	170	1.69	0.56	円形		土壤基か。
D - 25	X208, Y149	086	0.70	0.08	椭円形		
D - 28	X205 - 206, Y149	134	1.24	0.37	円形		土壤基か。
D - 29	X205, Y149	(1.10)	0.50	0.29	円形		土壤基か。
D - 30	X205, Y148	(1.87)	1.18	0.09	椭円形		
D - 31	X204, Y149	132	1.00	0.20	円形		土壤基か。
D - 32	X204 - 205, Y148 - 149	134	1.16	0.28	円形	陶磁器・火鉢・砥石	土壤基か。
D - 33	X204 - 205, Y148	(1.12)	1.12	0.37	円形	磁器・灰皿・石碗・古銭	土壤基か。
P - 2	X199, Y150	048	0.44	0.20	円形		
P - 3	X199, Y150	026	0.25	0.11	円形		
P - 4	X199, Y150	(0.63)	0.55	0.19	椭円形		
P - 5	X200, Y149 - 150	(1.60)	0.10	0.11	不整形		
P - 6	X200, Y149 - 150	(7.2)	6.16	0.25	椭円形		
P - 7	X200, Y150	062	0.56	0.48	円形		
P - 8	X200, Y150	027	0.26	0.13	円形		
P - 9	X200, Y150	057	0.53	0.13	円形		
P - 10	X200, Y150	044	0.41	0.27	円形		
P - 11	X200, Y151	026	0.23	0.48	円形		
P - 12	X200, Y150 - 151	048	0.44	0.41	円形		
P - 13	X200, Y150 - 151	033	0.27	0.23	椭円形		
P - 14	X200, Y151	036	0.33	0.35	円形		
P - 15	X200, Y151	035	0.33	0.30	円形		
P - 16	X199, Y153	(2.15)	1.11	0.12	椭円形		
P - 17	X202, Y152	058	0.51	0.29	円形		
P - 18	X202, Y151 - 152	072	0.41	0.21	長方形		
P - 19	X200 - 201, Y148 - 149	039	0.33	0.07	円形		
P - 20	X201, Y149	039	0.30	0.09	円形		
P - 21	X201, Y148	046	0.45	0.07	円形		
P - 23	X208, Y148	050	0.47	0.12	椭円形		
P - 24	X208, Y148	028	0.29	0.08	円形		
P - 25	X208, Y149	044	0.29	0.04	長方形		
P - 26	X209, Y149	046	0.45	0.30	円形		
P - 27	X209, Y149	074	0.69	0.08	円形		
P - 28	X209, Y149	074	0.70	0.31	不整形		
P - 29	X208, Y149	058	0.38	0.07	椭円形		
P - 30	X209, Y149	053	0.30	0.06	円形		
P - 31	X206, Y149	048	0.45	0.08	円形		
P - 32	X207 - 208, Y149	054	0.46	0.09	円形		
P - 33	X207, Y149	037	0.33	0.09	円形		
P - 34	X207, Y149	019	0.16	0.08	円形		
P - 35	X207, Y149	023	0.21	0.07	円形		
P - 36	X207, Y149	031	0.22	0.09	椭円形		
P - 37	X207, Y149	027	0.24	0.07	円形		
P - 38	X207, Y149	022	0.18	0.33	円形		
P - 41	X206, Y148	029	0.29	0.13	円形		
P - 42	X206, Y148	023	0.23	0.11	円形		
P - 43	X206, Y148	054	0.33	0.11	椭円形		
P - 44	X206, Y148 - 149	049	0.39	0.08	椭円形		
P - 45	X206, Y149	042	0.36	0.30	円形		
P - 46	X206, Y149	022	0.26	0.16	円形		
P - 47	X206, Y149	031	0.27	0.15	円形		
P - 48	X206, Y149	046	0.54	0.20	椭円形		
P - 49	X206, Y149	046	0.42	0.20	円形		
P - 50	X206, Y149	030	0.36	0.19	椭円形		
P - 51	X206, Y149	028	(0.11)	0.18	椭円形		
P - 52	X206, Y149	016	0.20	0.17	円形		
P - 53	X206, Y149	(0.19)	(0.33)	0.13	椭円形		
P - 54	X209, Y149	(0.38)	(0.42)	0.27	円形		
P - 55	X206, Y148	035	0.36	0.15	円形		

※D - 7 - 9 - 12 - 15 - 22 - 24 - 26 - 27 - 34 - 35, P - 1 - 22 - 29 - 40は欠番。

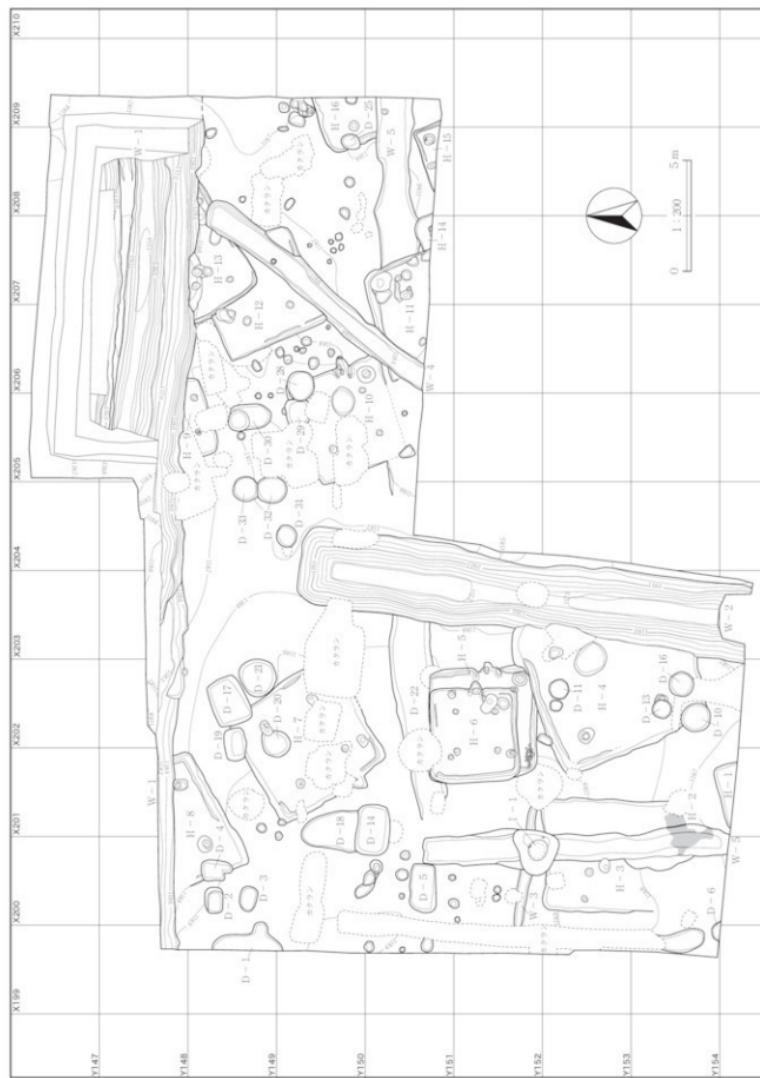


Fig.5 調査区全体図

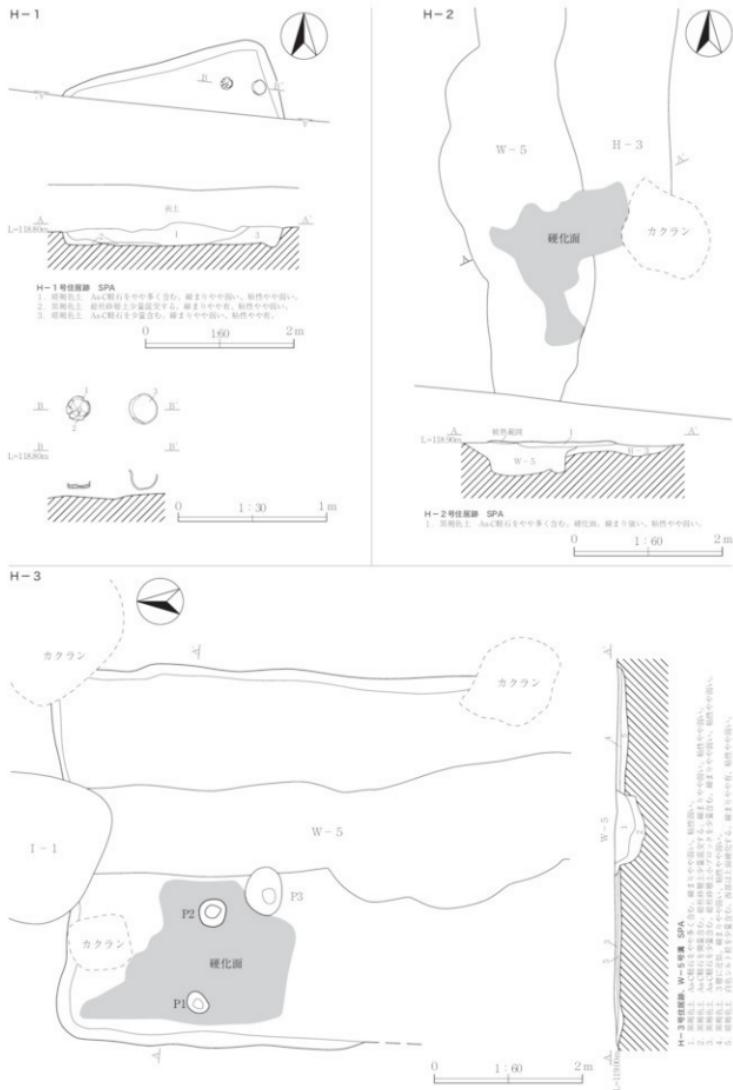
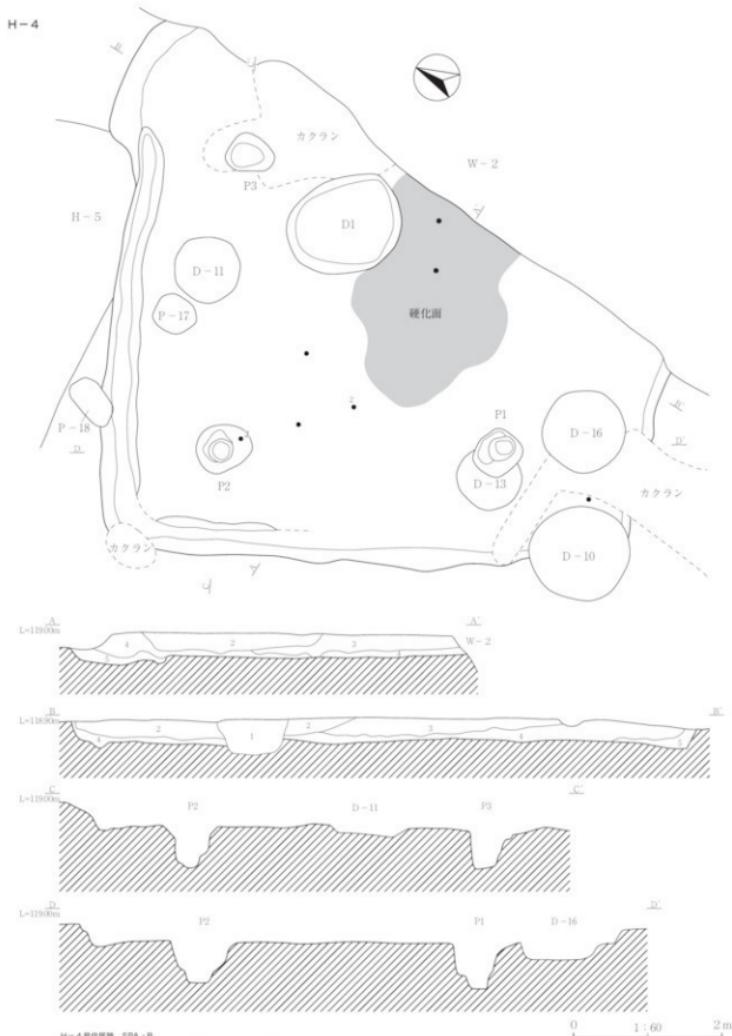


Fig. 6 H-1~3号住居跡



- H-4号住居跡 SPA・B
1. 面向北。壁面、床面カクラン。縫まりやびたり、粘性弱い。
 2. 初期孔上。Aca類石を多く含む。縫まりやびたり、粘性弱い。
 3. 初期孔上。Aca類石をやや多く含む。縫目が壁上小プロックを複数含む。
 4. 初期孔上。縫目が壁上小プロックをやや多く含む。縫まり弱い、粘性やや弱い。

Fig.7 H-4号住居跡

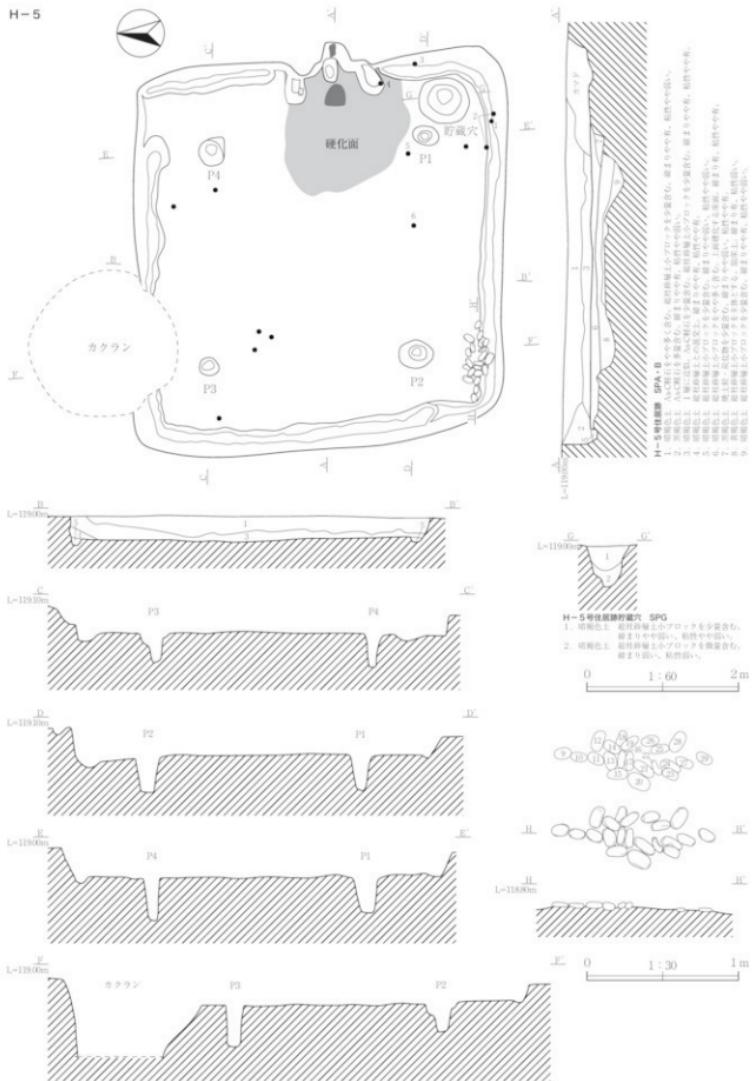
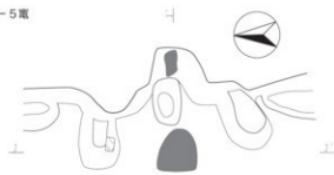


Fig. 8 H-5号住居跡



H-5電



H-

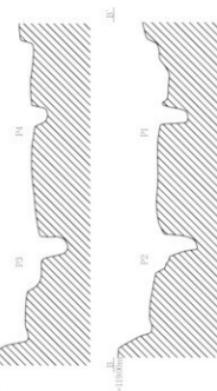
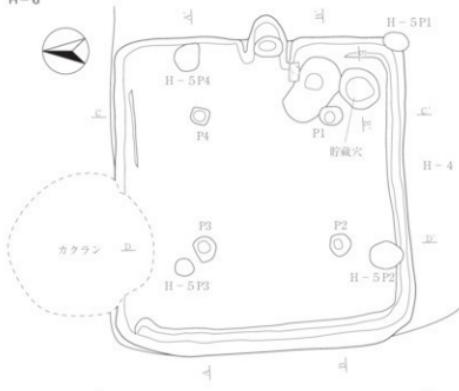


H-5住居跡壁面 SP5・J

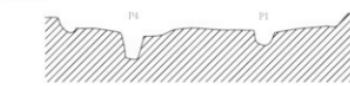
1. 建物跡上。
2. 建土層を複数含む。柱跡等の小ブロックを複数含む。
3. 建土層、表面は少々荒れ、礫よりやや細い。
4. 建土層。
5. 建土層、表面は少々荒れ、礫よりやや細い。
6. 建土層。
7. 建土層。
8. 建土層を複数含む。柱跡等の小ブロックを複数含む。
9. 建土層。
10. 建土層。
11. 建土層。
12. 建土層。

0 1:30 1m

H-6



L=1190mm



L=1190mm

L=1190mm

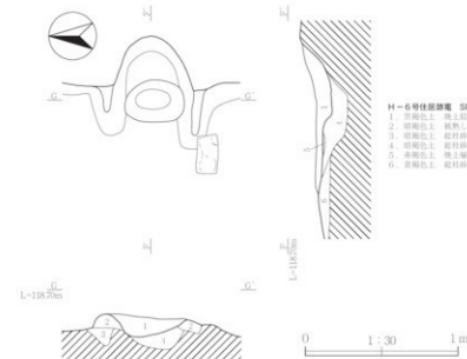


0 1:60 2m

Fig.9 H-5号住居跡、H-6号住居跡



H-6号



H-6号住居跡 SPF・G

1. 砂利地盤上に土塁を多く有む。其相思軸线上北段、縦1.4mやや高、傾性やや有り、純然として砂利を含むる粘土質。セドロの層、縦1.3mやや高。
2. 砂利地盤上、砂利地盤を含むる粘土質。縦1.3mやや高、傾性やや有り。
3. 砂利地盤上、起柱脚層上からブリッジを少數含む。縦1.3mやや高、傾性やや有り。
4. 砂利地盤上、砂利地盤を含むる粘土質。縦1.3mやや高、傾性やや有り。
5. 砂利地盤上、砂利地盤を含むる粘土質。縦1.3mやや高、傾性やや有り。
6. 黄褐色土、起柱脚層上からブリッジを主体とする。且柱脚深層、縦1.3m、傾性弱い。

H-7、D-19・20

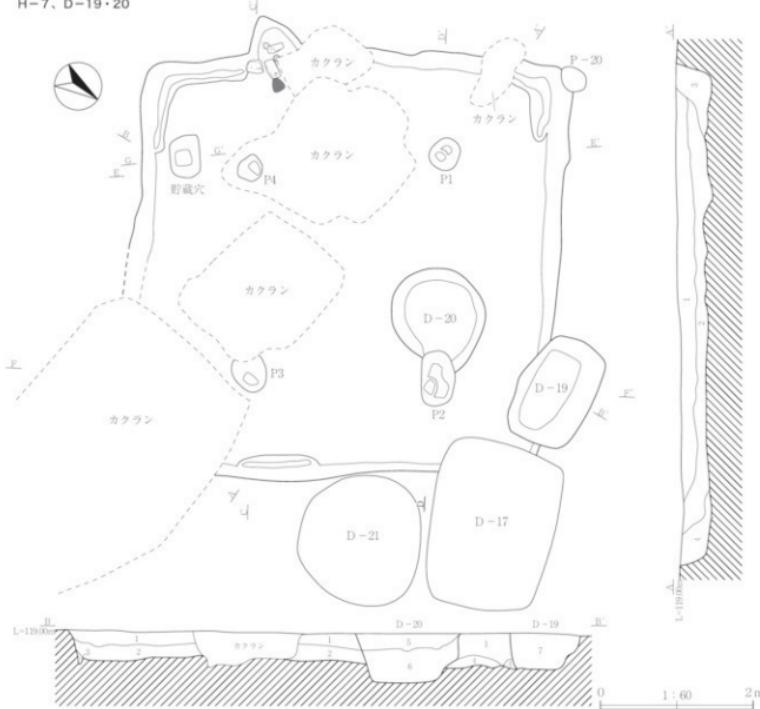


Fig.10 H-6号住居跡竪、H-7号住居跡、D-19・20号土坑

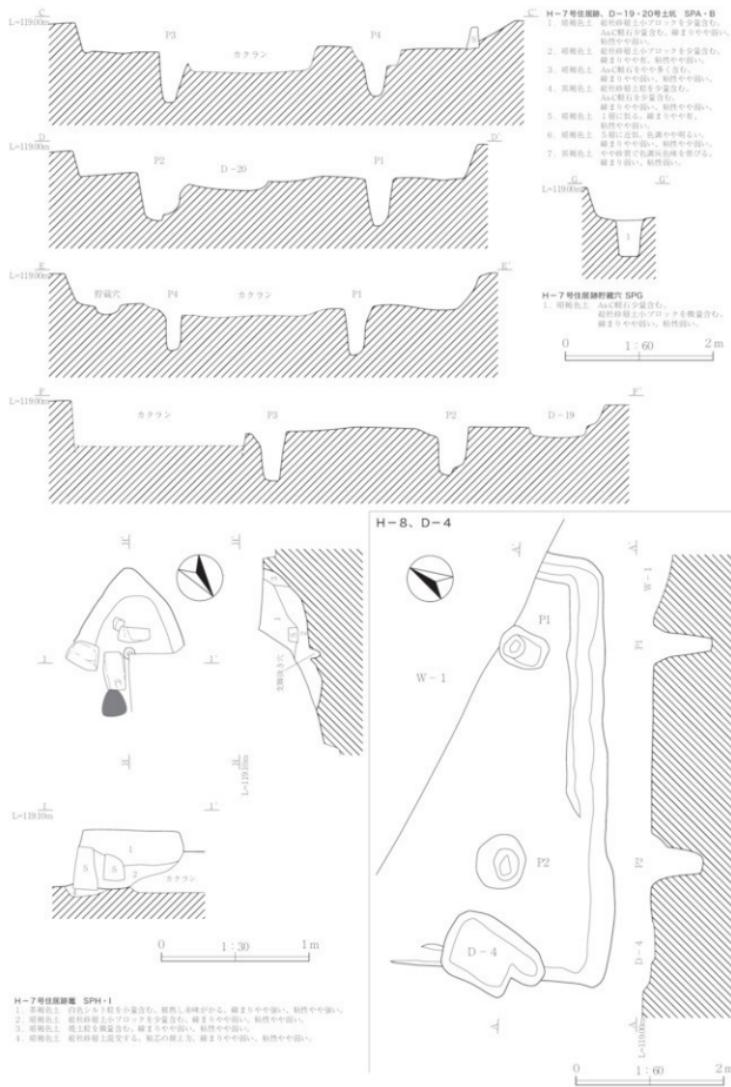


Fig.11 H-7・B号住居跡、D-4・19・20号土坑

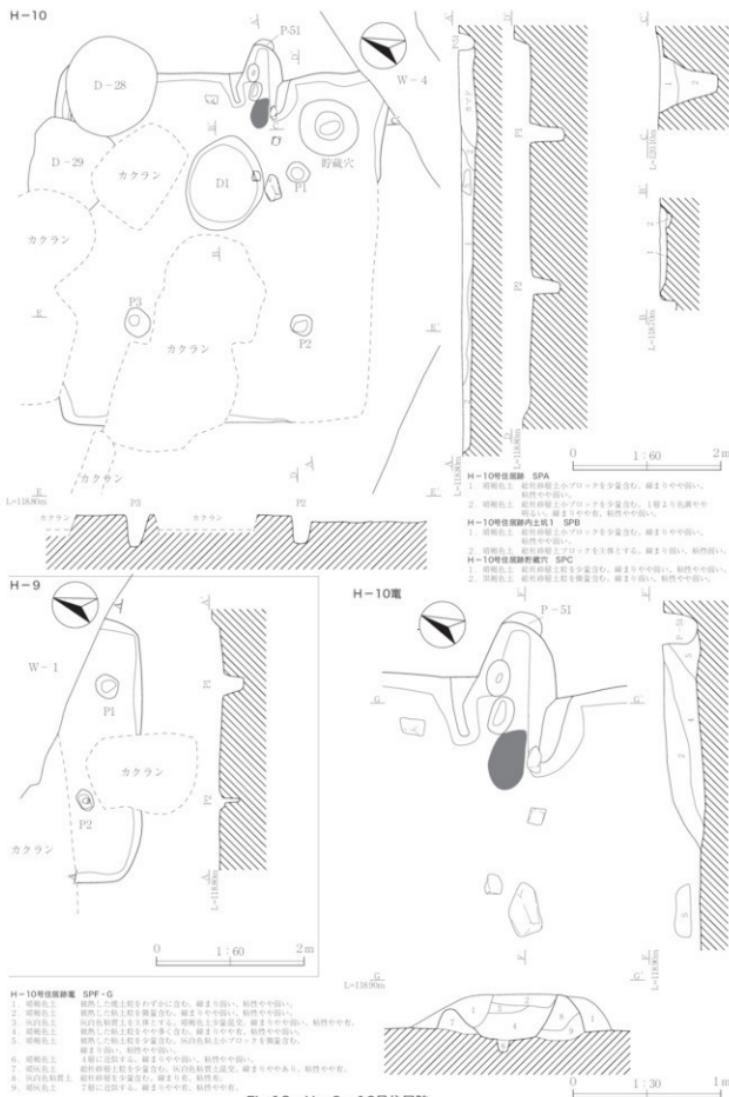
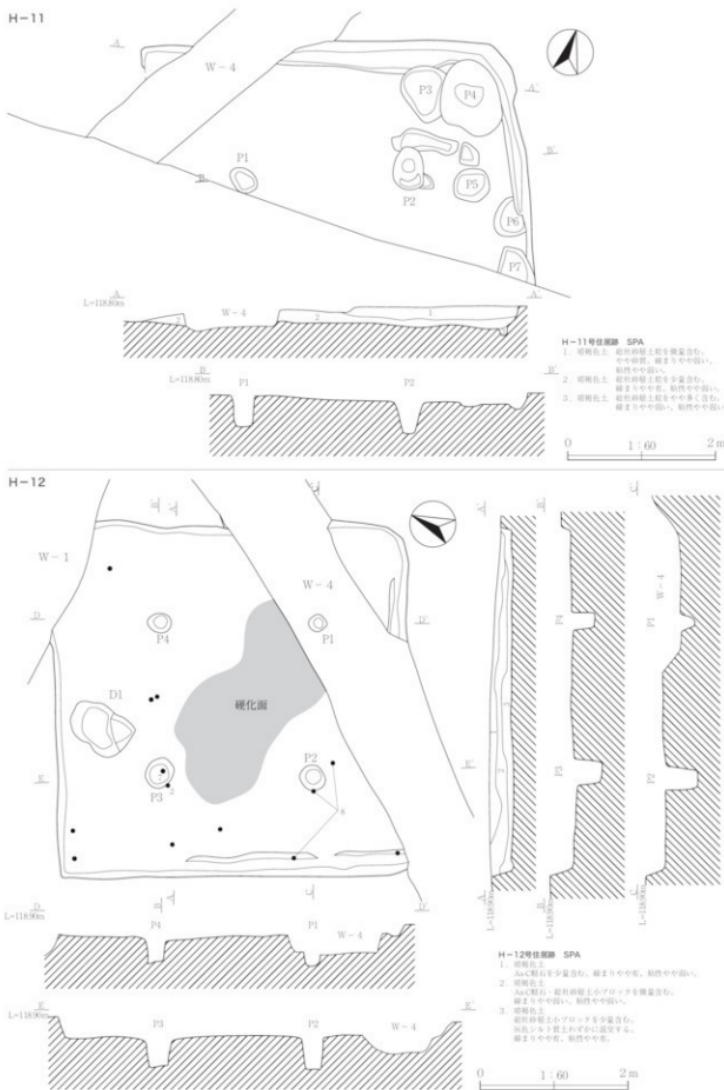


Fig.12 H-9・10号住居跡



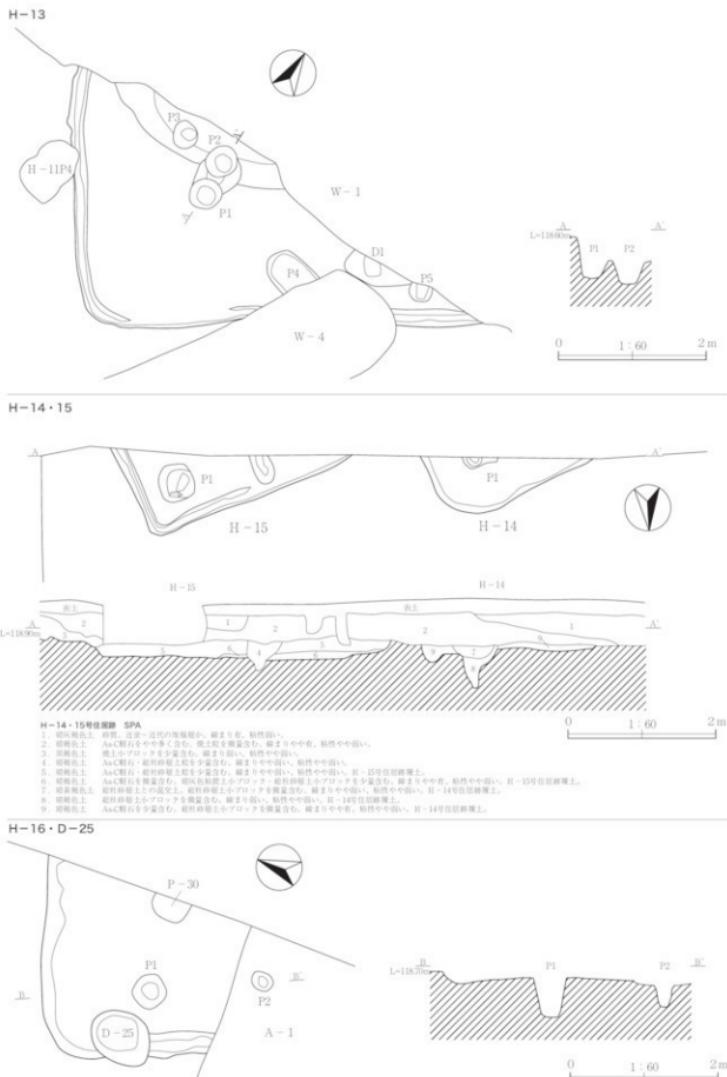
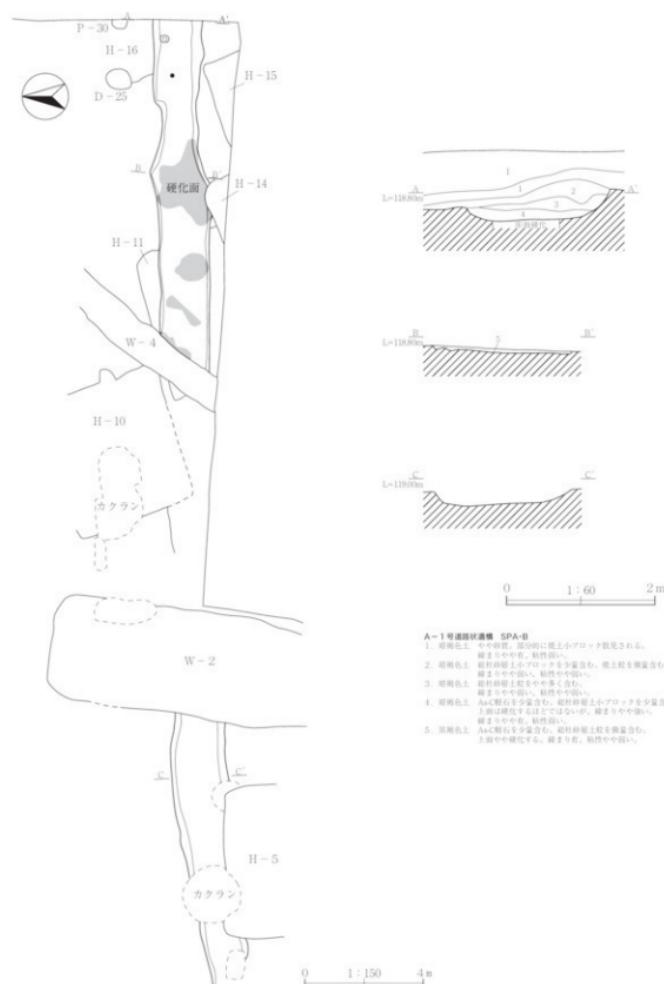


Fig.14 H-13～16号住居跡、D-25号土坑



A-1



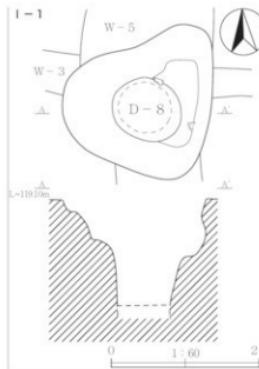
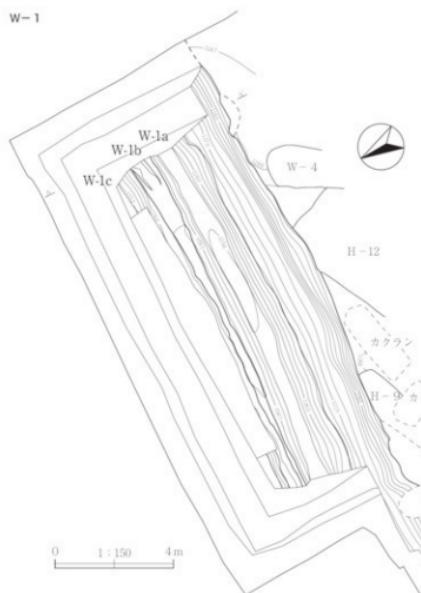
A-1号道路状遺構 SPA-B

1. 布局柱上。柱状帶に埋土小ブロックが見られる。
同様のやや老、物理的弱い。
2. 布局柱上。柱状帶上をブロックを少量含む。未上程を兼含む。
3. 布局柱上。柱状帶は土粒をや多く含む。
同様のやや弱い。物理や中弱い。
4. 布局柱上。柱状帶は土粒を多く含む。柱状帶上をブロックを少量含む。
同様のやや老、物理弱い。
5. 布局柱上。柱状帶を含む。柱状帶上を少量含む。
土粒やや硬さなし。同様のやや弱い。

Fig.15 A-1号道路状遺構



W-1



- W-1号井 SPA**
1. 黄褐色土 中や砂質。粘性弱い。
 2. 黄褐色土 中や砂質。灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 3. 黄褐色土 中や砂質。灰白色粘土層を少多く含む。2層より化成明るい。緻密やや弱い。
 4. 黄褐色土 中や砂質。灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 5. 黄褐色土 灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 6. 黄褐色土 灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 7. 黄褐色土 灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 8. 黄褐色土 灰白色粘土層を多含む。緻密やや弱い。
 9. 黄褐色土 灰白色粘土層と灰色の泥炭交じりの層。緻密やや弱い。
 10. 黄褐色土 灰白色粘土層と灰色の泥炭交じりの層。緻密やや弱い。
 11. 黄褐色土 灰白色粘土層を多含む。緻密やや弱い。
 12. 黄褐色土 灰白色粘土層を多含む。緻密やや弱い。
 13. 黄褐色土 灰白色粘土層を多含む。緻密やや弱い。
 14. 黄褐色土 灰白色粘土層と細砂層。緻密やや弱い。
 15. 黄褐色土 灰白色粘土層と細砂層。緻密やや弱い。
 16. 黄褐色土 灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。
 17. 黄褐色土 灰白色粘土層を少含む。緻密やや弱い。

Fig.16 W-1号溝、I-1号井戸

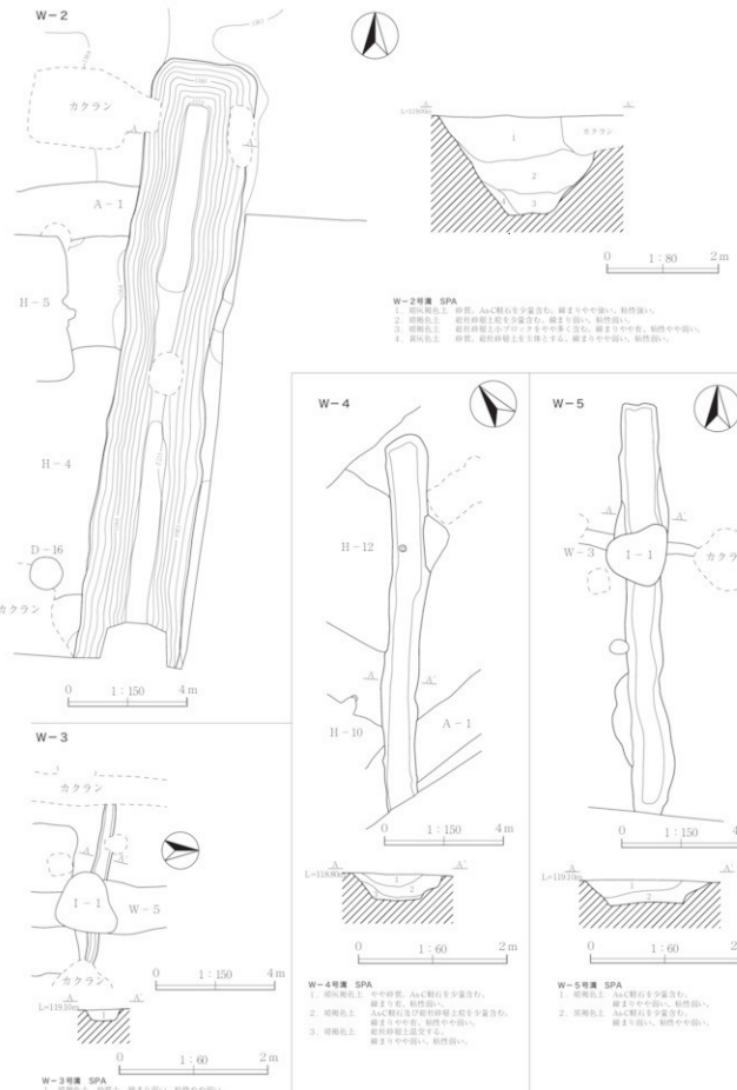


Fig.17 W-2～5号溝

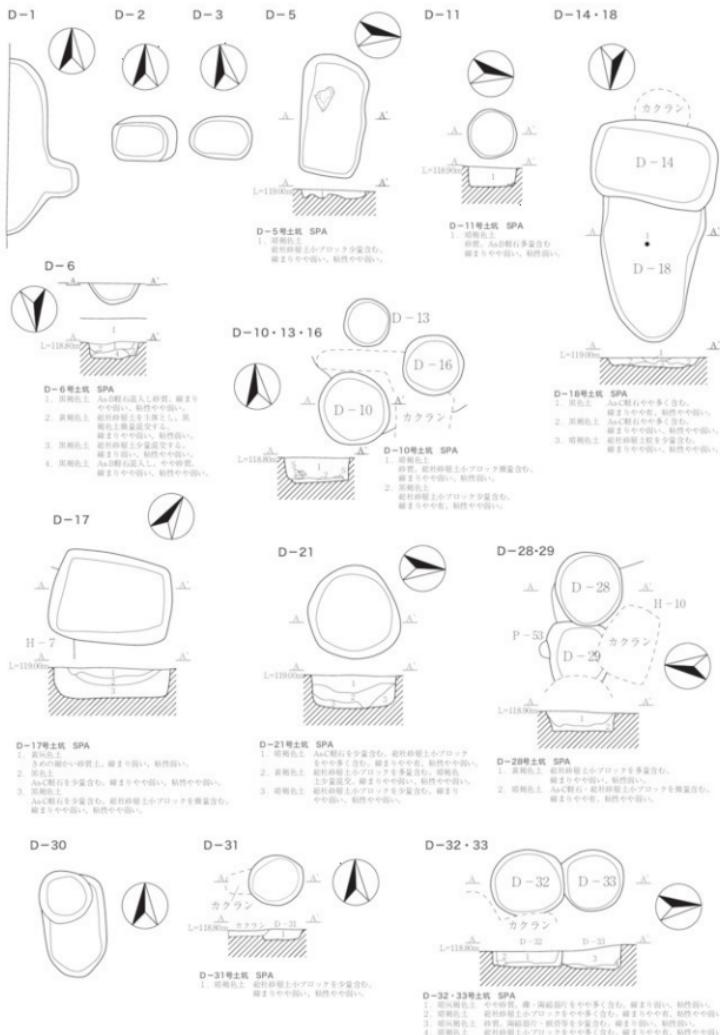


Fig.18 土坑

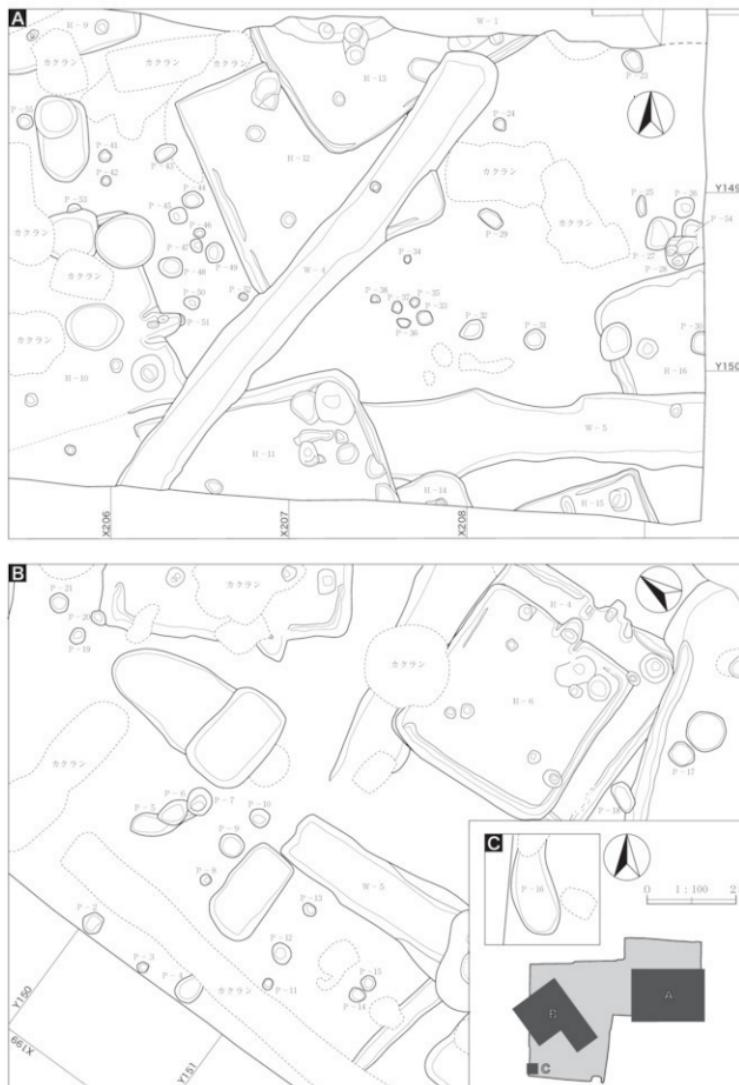


Fig.19 ピット群

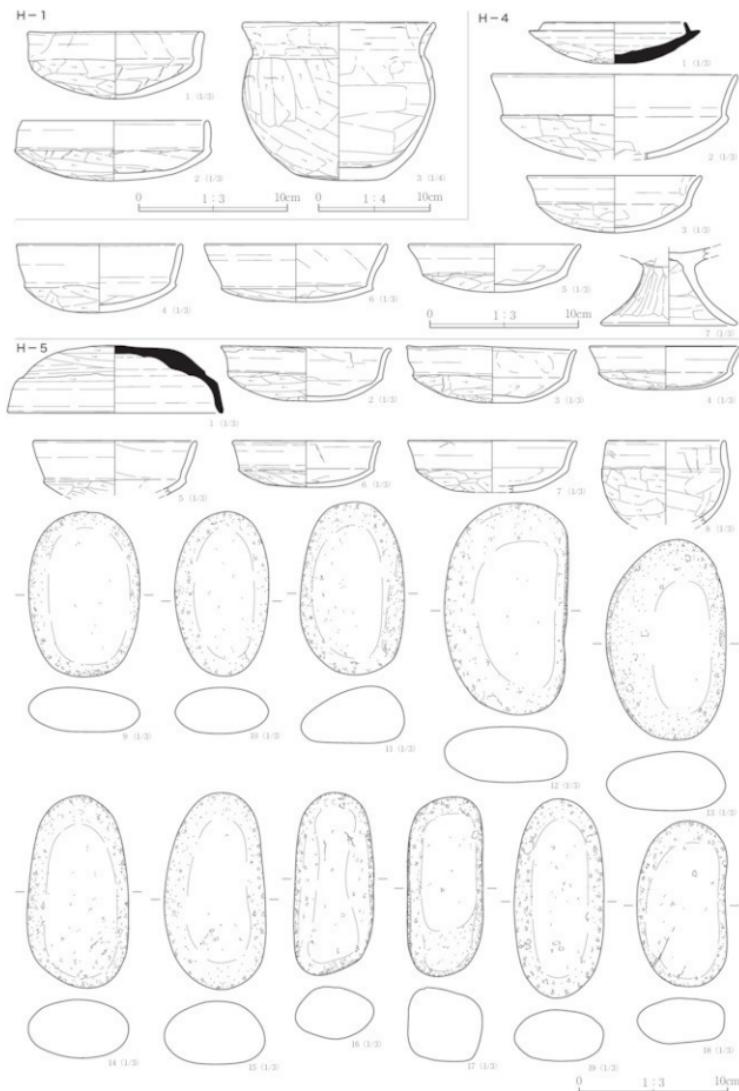


Fig.20 H-1・4・5号住居跡出土遺物

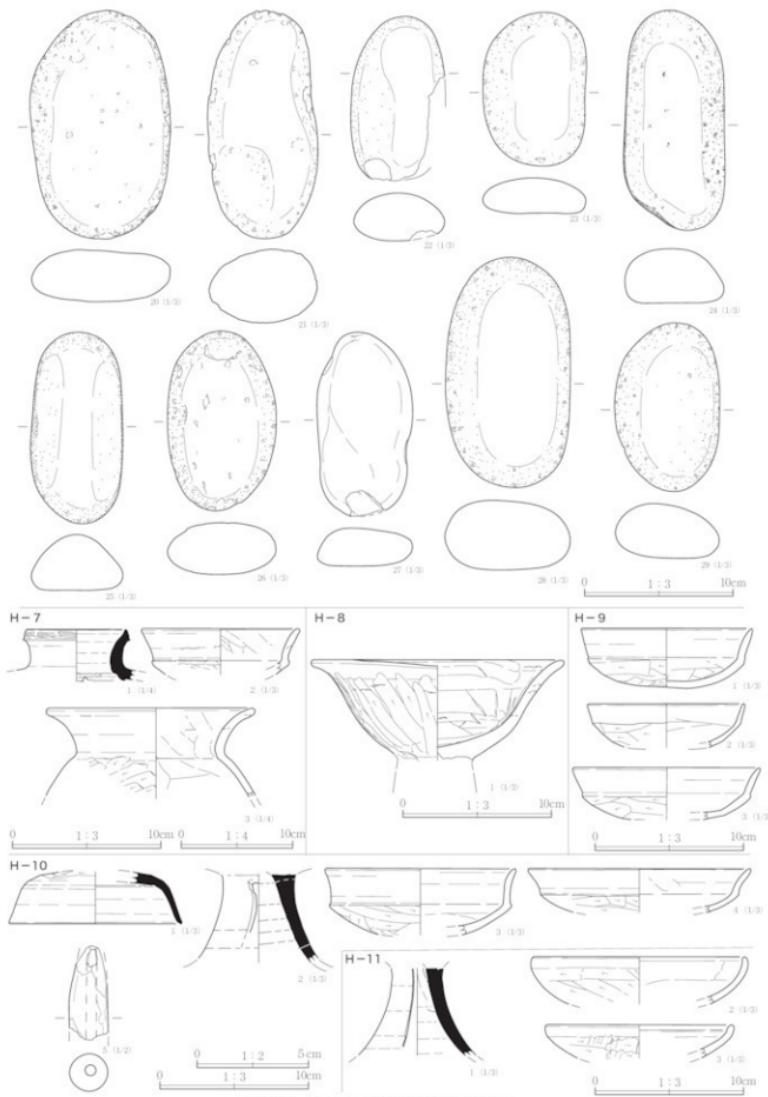


Fig.21 H-5・7~11号住居跡出土遺物

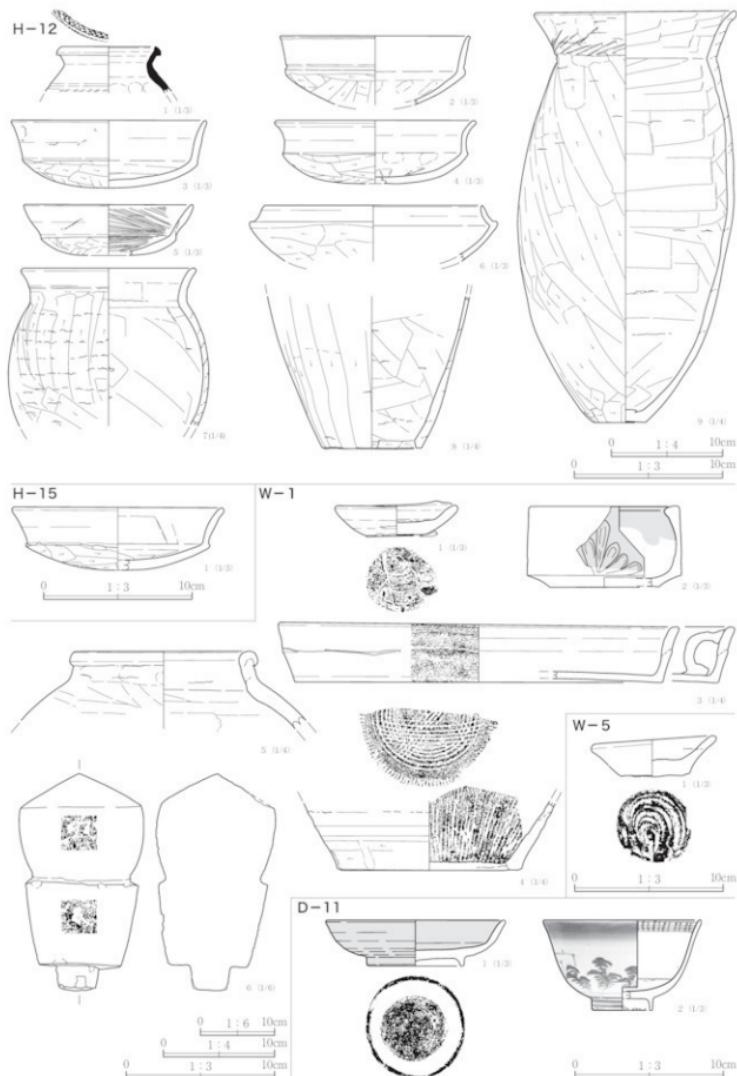


Fig.22 H-12・15号住居跡、W-1・5号溝、D-11号土坑出土遺物

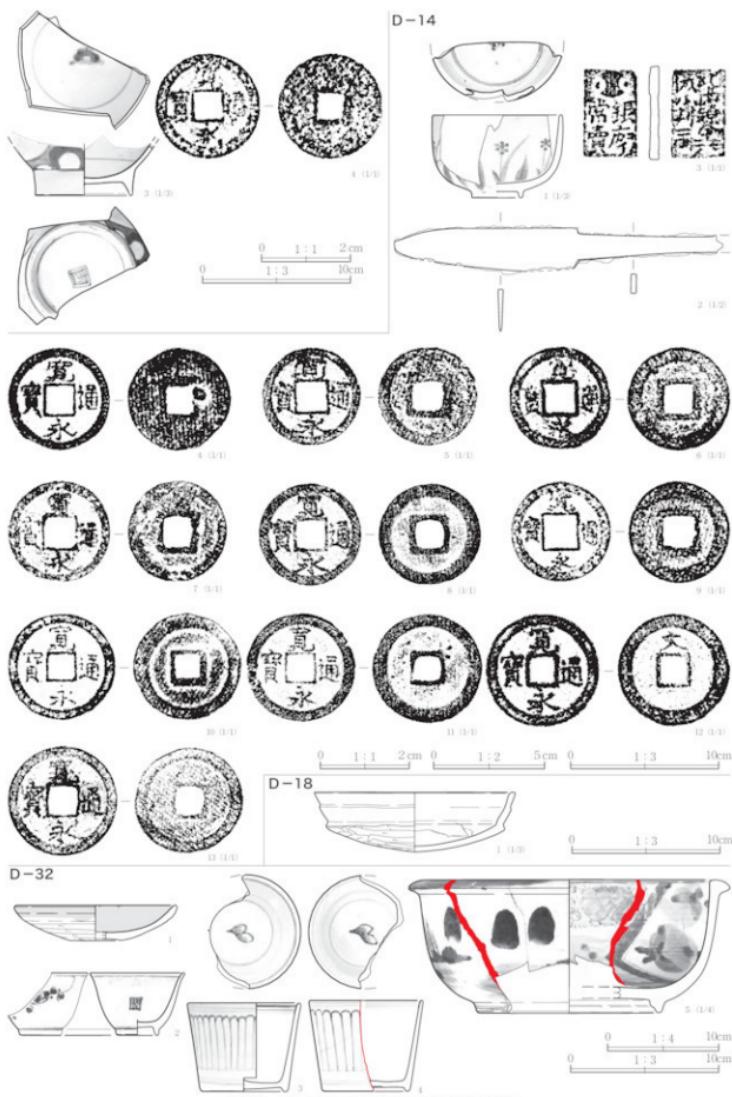


Fig.23 D-11·14·18·32号土坑出土遺物

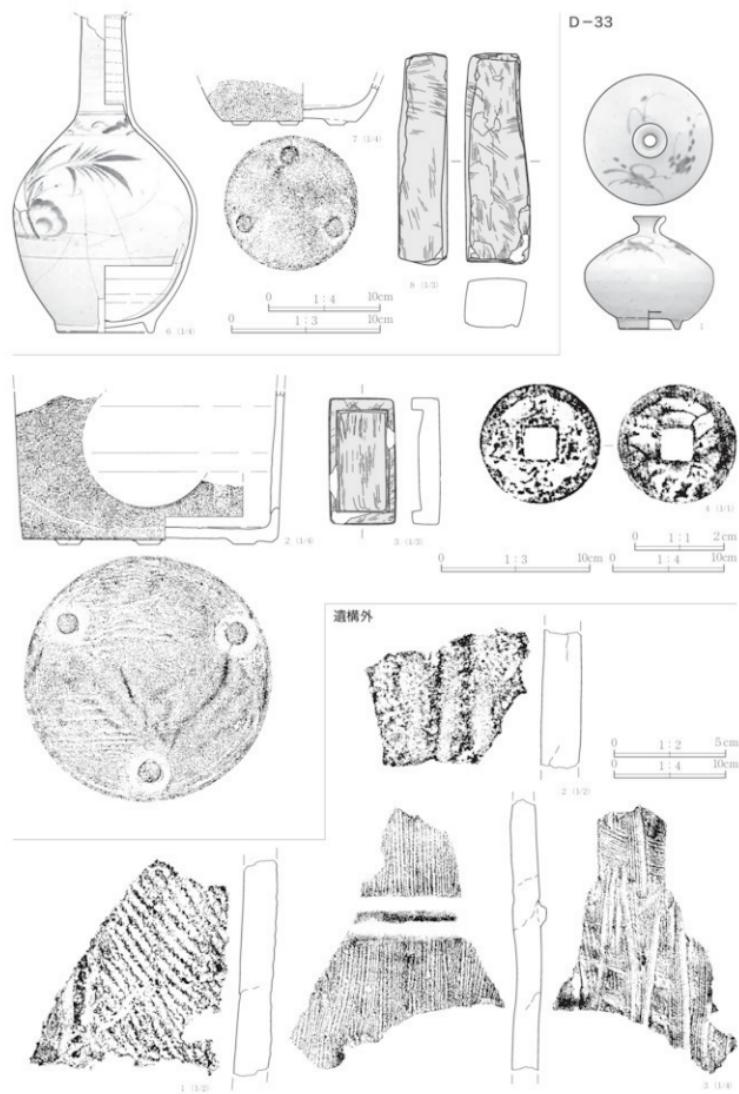


Fig.24 D-32・33号土坑・遺構外出土遺物



遺構外

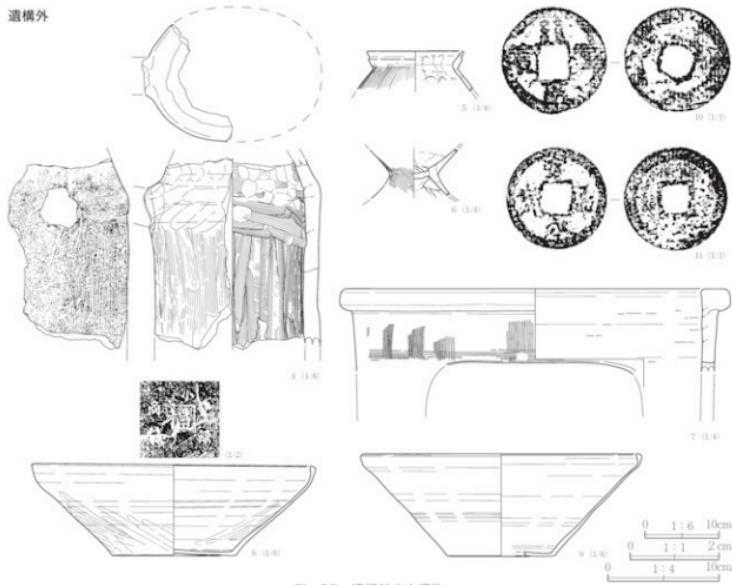


Fig.25 遺構外出土物

Tab.3 出土遺物観察表

H-1

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	出土	焼成	色調	形状、成・形態、文様等の特徴	現存状況、備考
1	床面土上	土器部 壁	11.8	4.5	4.5	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。外側ハラカリ。	4/5残存。
2	床面土上	土器部 壁	12.5	4.6	4.1	白・黒・褐色	良好	明赤褐色	内面1面縦コリナ。外側ハラカリ調整。	1/4残存。
3	床面土上	土器部 壁	(12.1)	7.6	14.2	白・黒・褐色	良好	12.0 小口	内面1面縦コリナ。外側ハラカリ。手すり半周ハラカリ。	3/4残存。外周部行。

H-4

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	出土	焼成	色調	形状、成・形態、文様等の特徴	現存状況、備考
1	壤土	土器部 壁	8.5	-	12.0	白・黒・褐色	極端	灰黑色	外側1面縦コリナ。内側から半周ハラカリ。	1/4残存。
2	床面土上	土器部 壁	(16.4)	-	13.7	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。外側ハラカリ。	1/3残存。
3	床面土上	土器部 壁	11.6	-	3.9	白・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	定形。
4	汚泥土	土器部 壁	11.0	-	4.6	白・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	2/3残存。
5	壤土	土器部 壁	(11.4)	-	13.0	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	1/4残存。
6	壤土	土器部 壁	12.2	-	3.9	白・黑色	良好	12.0 小口	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	3/4残存。
7	壤土	土器部 異形	-	9.0	15.0	白・褐色	良好	褐色	外周部ハラカリ。底面コリナ。	現存のみ1/4残存。

H-5

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	出土	焼成	色調	形状、成・形態、文様等の特徴	現存状況、備考
1	床面土上	土器部 壁	14.4	-	4.5	白・灰色・ 小口	極端	灰黑色	内面クロロス底面。底面一部は鉛灰ハラカリ。	1/4残存。一部欠損。
2	床面土上	土器部 壁	11.3	4.9	3.6	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。1.5Tハラカリ。	1/4残存。
3	床面土上	土器部 壁	11.3	4.9	3.8	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。1.5Tハラカリ。	3/4残存。
4	床面土上	土器部 壁	(10.2)	4.9	2.9	白・黒・褐色	良好	明赤褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	1/2残存。
5	床面土上	土器部 壁	(11.0)	4.9	3.6	白・黒・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	1/4残存。
6	床面土上	土器部 壁	(9.8)	4.9	3.1	白・黒・褐色	良好	明赤褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	1/2残存。
7	壤土	土器部 壁	(11.2)	4.9	3.3	白・褐色	良好	明赤褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。	1/2残存。
8	壤土	土器部 壁	(7.9)	4.9	3.6	白・褐色	良好	褐色	内面1面縦コリナ。2.3Tハラカリ。内側ハラカリ及びトド。	1/4残存。



番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ(g)	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
9	周面裏上	石器 こも輪石	11.1	7.9	3.0	鶴見安山岩	—	—	114.1	—	完存。
10	周面裏上	石器 こも輪石	11.0	6.4	3.2	鶴見	—	—	320.5	—	完存。
11	周面裏上	石器 こも輪石	11.6	7.0	2.8	白英閃緑岩	—	—	69.2	—	完存。
12	周面裏上	石器 こも輪石	14.3	8.3	3.8	安山岩	—	—	70.6	—	完存。
13	周面裏上	石器 こも輪石	13.5	8.1	4.4	鶴見安山岩	—	—	690.7	—	完存。
14	周面裏上	石器 こも輪石	13.0	6.9	4.1	鶴見安山岩	—	—	510.4	—	完存。
15	周面裏上	石器 こも輪石	13.2	6.8	4.3	鶴見安山岩	—	—	628.8	—	完存。
16	周面裏上	石器 こも輪石	12.5	5.4	4.0	鶴見安山岩	—	—	366.5	—	完存。
17	周面裏上	石器 こも輪石	12.1	5.1	5.0	鶴見安山岩	—	—	507.0	—	完存。
18	周面裏上	石器 こも輪石	11.2	6.1	3.2	白英閃緑岩	—	—	345.8	—	完存。
19	周面裏上	石器 こも輪石	13.4	6.9	3.5	鶴見安山岩	—	—	431.6	—	完存。
20	周面裏上	石器 こも輪石	15.4	9.5	3.5	鶴見安山岩	—	—	699.9	—	完存。
21	周面裏上	石器 こも輪石	15.4	7.9	5.0	鶴見安山岩	—	—	790.0	—	完存。
22	周面裏上	石器 こも輪石	11.1	6.0	3.6	鶴見安山岩	—	—	300.1	—	完存。
23	周面裏上	石器 こも輪石	10.4	6.9	2.6	鶴見安山岩	—	—	296.8	—	完存。
24	周面裏上	石器 こも輪石	14.8	6.8	3.7	鶴見安山岩	—	—	641.3	表面不規則、擦耗、燃れとして焼失。	完存。
25	周面裏上	石器 こも輪石	12.9	6.2	3.8	安山岩	—	—	503.6	表面凹凸。	完存。
26	周面裏上	石器 こも輪石	12.1	2.4	3.8	鶴見安山岩	—	—	424.9	—	完存。
27	周面裏上	石器 こも輪石	12.4	6.5	3.7	鶴見	—	—	327.4	—	一部欠損。
28	周面裏上	石器 こも輪石	15.5	8.5	4.7	鶴見安山岩	—	—	1038.9	—	完存。
29	周面裏上	石器 こも輪石	11.4	2.1	3.7	鶴見安山岩	—	—	408.1	—	完存。

H-7

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	土器	土器部 瓢	(3.0)	—	(4.6)	白・黑色斑	粗陶	褐色	外側ヨリ成型、内側は各部位焼成灰。内側は火照り跡。	H-8 土器部。
2	土器	土器部 瓢	(10.0)	8.0	(3.1)	白・黑色斑	真好	褐色	内側OB底部ヨリナガ、口内ハケナカリ。	H-8 土器部(火照り)。
3	土器	土器部 瓢	(18.0)	—	(6.0)	白・黑色斑	真好	褐色	内側OB底部ヨリナガ、口内ハケナカリ。	H-8 土器部(火照り)。

H-8

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	土器	土器部 瓢	(16.0)	—	(6.7)	白・黑色斑	真好	褐色	9時10度ヨリナガ、口内ハケナサイド底部有ナガ。内側OB底部ヨリナガ、口内ハケナサイド。	埋蔵5.

H-9

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	前底穴	土器部 瓢	11.4	4.1	小鉢	白・黑色斑	真好	褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド底部有ナガ。	完存。
2	土器	土器部 瓢	(10.0)	8.0	(3.0)	白・黑色斑	真好	褐色	内側OB底部ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/9底。
3	土器	土器部 瓢	(12.0)	8.0	(3.3)	白色斑、木柄	真好	褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	H-9 土器部。

H-10

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	土器	土器部 瓢	(11.0)	—	(3.0)	白・黑色斑	粗陶	褐色	内側口付近底、天井部周辺ハケナサイド。内側口付近底。	H-9 土器部(口付近底)。
2	土器	土器部 瓢	—	—	(3.0)	白・黑色斑	粗陶	褐色	口付近底。	無。
3	土器	土器部 瓢	(12.7)	8.0	(4.5)	黑・白・赤色斑	真好	明赤褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	2/5底。
4	土器	土器部 瓢	(14.0)	8.0	(2.9)	黑・白・赤色斑	真好	明赤褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	H-9 土器部。
5	土器底	土器部 瓢	—	—	—	白・黑・赤色斑	真好	明赤褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/2底付近壁。

H-11

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	土器	土器部 瓢	(6.1)	—	(3.1)	白・黑色斑	粗陶	褐色	クロロ成型。	無。
2	土器	土器部 瓢	(14.2)	8.0	(3.1)	白・黑色斑	真好	明赤褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	H-9 土器部。
3	土器	土器部 瓢	(12.0)	8.0	(2.2)	黄黒斑	真好	明赤褐色	内側10度ヨリナガ、口内ハケナサイド。	H-9 土器部。

H-12

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	断形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	土器	土器部 瓢	(6.5)	—	(3.0)	白・黑色斑	粗陶	褐色	内側10度ヨリナガ底周に黒色あり、側部ハケナリ。	H-9 土器部。
2	土器裏上	土器部 瓢	(12.7)	8.0	(4.7)	白・黑・赤色斑	真好	明赤褐色	内側OB底ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/4底。
3	土器	土器部 瓢	(13.0)	8.0	(4.5)	白・黑色斑	真好	明赤褐色	内側OB底ヨリナガ、口内ハケナサイド。	3/4底。
4	土器	土器部 瓢	(13.0)	8.0	(4.0)	白・黑色斑	真好	明赤褐色	内側OB底ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/3底付近。
5	土器	土器部 瓢	(11.0)	8.0	(3.4)	白・黑・赤色斑	真好	明赤褐色	内側OB底ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/3底付近。
6	土器	土器部 瓢	(14.0)	8.0	(3.7)	赤色斑少量	真好	明赤褐色	内側OB底ヨリナガ、口内ハケナサイド。	1/3底付近壁。





番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考	
2	表面土	土器部 瓦	(154) — (142)	白・黒色鉢	良好	にぶい黄色	外側斜面カタツミ、瓦片頭部・側面長範囲にラクタリ、内側斜面ヨコナリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラナリ。	1/4地・一部地元。	
8	表面土	土器部 瓦	丸底 90 (136)	白・黒・茶色鉢	良好	明赤褐色	内側斜面ハラタギリ、底面ハラタギリ。内側斜面ヨコナリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。	倒手半・底部2/4、内側斜面ヨコナリ。	
9	底土	土器部 瓦	179 46 369	白・黒色鉢	良好	にぶい黄褐色	外側斜面カタツミ、瓦片頭部・側面長範囲にラクタリ、内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。	3/4地元。内側斜面にヘアリの鉢底部。	
H-15	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土	土器部 瓦	(141) 丸底 (425)	白・黒・茶色鉢	良好	明赤褐色	内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。	1/4地元。	
W-1	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土上層	手仕上げ	8.3 39 2.3	凸輪鉢、黒赤鉢	良好	にぶい褐色	内側ヨリロリ。底面斜面ホリ。	1/4地元。内側斜面ヨコナリ。	
2	底土上層	陶器 勾形手摺	19.0 (12.0) 5.5	粘土質	塑壓	明赤褐色	ヨリヨリ堅。	1/4地元。内側斜面ヨコナリ。	
3	底土上層	帆立貝殻 烧成	(25.6) (33.0) 5.4	白・黒色細縫	良好	灰褐色	内側ヨリ堅成形。底部ハラタギリ調整。	1/4地元。外壁表面、底面ハラタギリ。	
4	底土上層	帆立貝殻 烧成	(16.1) (16.2)	白石器類	小禮	褐色	内側ヨリ堅成形。底部ハラタギリ調整。底面ハラタギリ。	1/4地元。底面斜面・側面。	
5	底土上層	瓦底 瓦	(13.7) —	白・黒・茶色鉢	良好	にぶい黄褐色	内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。底面斜面ヨコナリ。	1/4地元。底面斜面。	
番号	出土位置	種別、器種	高さ(cm)幅(cm)厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ(g)	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
6	底土	石器品 三足鼎	29.2 168 —	鐵山安山岩	—	—	7200	様子「キヨ」「カ」	1/4地元。
W-5	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土	手仕上げ	(8.1) 43 2.8	白・黒・茶色鉢	良好	灰褐色	内側斜面ヨコナリ。底面斜面ホリ。	1/4地元。	
D-11	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土	陶器 瓦	(12.0) 6.0 3.1	粘土質	塑壓	灰オーライト	ヨリヨリ堅成形。底面斜面ホリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ後面西面。	1/4地元。内側斜面ヨコナリ。	
2	底土	前部 壁面付	(10.0) (4.0) 6.1	粘土質	塑壓	灰褐色	ヨリヨリ堅。内側斜面付。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面付。	
3	底土	前部 壁面付	— (6.0) (3.0)	粘土質	塑壓	灰褐色	ヨリヨリ堅。内側斜面付。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面付。	
番号	出土位置	種類名	初期時代	材質	外径	容積	厚さ	重量	推定状況、備考
1	底土	乳頭瓦 (古窯瓦路)	306年	陶	23.0mm	3.77ml	1.5mm	26g	完形。
D-14	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土	陶器 瓦	(12.0) 6.0 3.1	粘土質	塑壓	灰オーライト	ヨリヨリ堅成形。底面斜面ホリ。内側斜面ヨコナリ。	1/4地元。内側斜面ヨコナリ。	
番号	出土位置	種別、器種	高さ(cm)幅(cm)厚さ(cm)	土径	焼成	色調	重さ(g)	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
2	底土	陶器品	(14.0) 20 0.2	—	—	—	201	—	1/4地元。内側斜面付。
番号	出土位置	種類名	初期時代	材質	外径	容積	厚さ	重量	推定状況、備考
3	底土	丸形罐 (牛頭罐 (3型切妻口))	—	土質	20.0mm	10.2ml	2.0mm	0.6g	完形。
番号	出土位置	種類名	初期時代	材質	外径	容積	厚さ	重量	推定状況、備考
4	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	19.7mm	6.13ml	1.1mm	24g	完形。
5	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	22.0mm	7.20ml	1.0mm	21g	完形。
6	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	21.0mm	7.16ml	1.2mm	23g	完形。
7	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	22.0mm	7.01ml	0.9mm	15g	完形。
8	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	21.0mm	6.93ml	0.9mm	23g	完形。
9	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	22.0mm	7.06ml	1.2mm	25g	完形。
10	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	24.0mm	8.19ml	1.3mm	29g	完形。
11	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1636年	陶	24.0mm	8.06ml	1.1mm	26g	完形。
12	底土	雨水通管 (古窯本鍋)	1688年	陶	25.7mm	8.39ml	1.2mm	32g	完形。
13	底土	雨水通管 (新窯本鍋)	1697年	陶	24.5mm	8.71ml	0.8mm	18g	完形。
D-18	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	表面土	土器部 瓦	135 4.0	白・黒・茶色鉢	良好	褐色	内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面ヨコナリ。	
D-32	番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)底径(cm)厚さ(cm)	鉢土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	推定状況、備考
1	底土	陶器 丸形瓶	10.8 3.4 2.4	粘土質	塑壓	にぶい黄褐色 にぶい褐色	外側斜面カタツミ。底面斜面にラクタリ。内側斜面ホリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。内側斜面ヨコナリ。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面に化粧付付。底面ハラタギリ。	
2	底土	瓶器 瓦	16.0 2.7 4.2	粘土質	塑壓	灰褐色	ヨリヨリ堅。	1/4地元。	
3	底土	瓶器 そば瓶II	(7.0) 5.7 6.0	粘土質	塑壓	明赤褐色	ヨリヨリ堅。内側斜面付。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面付。	
4	底土	瓶器 そば瓶II	(7.0) 5.7 6.1	粘土質	塑壓	明赤褐色	ヨリヨリ堅。内側斜面付。底面ハラタギリ。	1/4地元。内側斜面付。	
5	底土	瓶器 瓦	16.0 12.0 9.0	粘土質	塑壓	灰褐色	ヨリヨリ堅。	1/4地元。内側斜面付。	



D-32

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)×底径(cm)×高さ(cm)	出土	造成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴			
							断面	底径(cm)	高さ(cm)	
6	出土	断面 細長	— (66) × (28)	粘土質	堅韌	灰白色	ロクロ成形・外周輪打	2.3kg 重最重 17g		
7	出土	軽質陶器 開口	— 13.9 (37)	白・淡色系	直壁	黄褐色	内側ヨコ模様高さ本底厚さ1/2程度打	直壁のみ残存		
							内側ヨコ模様打	直径約1.4m		
番号	出土位置	種別、断面	真さ(cm)×幅(cm)×厚さ(cm)	石材	造成	色調	重さ(g)	断面、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考	
8	表面土上	石製品 破片	14.5 3.3 3.5	灰岩	—	—	361.4	表・裏とも無孔・下下面、全縁に斜削れ有り	14kg	

D-33

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)×底径(cm)×高さ(cm)	出土	造成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴			保存状況、備考	
							断面	底径(cm)	高さ(cm)		
1	出土	断面 細長	2.1 4.0 7.6	粘土質	堅韌	灰白色	ロクロ成形・外周輪打	保存	重最重 13g		
2	出土	軽質陶器 開口	— 22.4 (138)	白・淡色系	直壁	オリーブ色	内側ヨコ模様打	直壁のみ残存	直径約1.4m		
番号	出土位置	種別、断面	真さ(cm)×幅(cm)×厚さ(cm)	石材	造成	色調	重さ(g)	断面、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考		
3	出土	石製品 細長	8.5 4.3 1.9	灰岩	—	—	121.8	両端に若干剥離・残存している。	14kg		
番号	出土位置	種別	初期年代	材質	外径	穿孔	厚さ	重量	保存状況、備考		
4	出土	丸久水質	1863年	鋼	—	—	26.6mm	7.11mm	141mm	33g	保存 著微小一例。

遺構外

番号	出土位置	種別、断面	口径(cm)×底径(cm)×高さ(cm)	出土	造成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴			保存状況、備考	
							断面	底径(cm)	高さ(cm)		
1	表層	調文 深溝	— (97)	白・淡色系	直壁	灰白色	内側ヨコ模様打	直溝(内側内底丸め)、尖なし。	細部有り 加材料有り。		
2	表層	調文 深溝	— (92)	白・淡色系	直壁	灰白色	内側ヨコ模様打	(深溝)内側(内) 調文有り。	細部有り 加材料有り。		
3	表層 内筒取黏	—	— (245)	白・淡色系	直壁	明ホタル色	内側ハテ(内側壁)、直面及び内底(内)、内底面ハサリ(内側壁)、直面及び内底(内)。	内筒(内)直面(内)、直面(内)直面(内)。	細部有り 加材料有り。		
番号	出土位置	種別、断面	真さ(cm)×幅(cm)×厚さ(cm)	石材	造成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	保存状況、備考			
4	表層	瓦集積物	125.7	白・淡色系	直壁	灰白色	内側ヨコ模様打(内側壁)、内底(内)ハサリ(内)、内底(内)直面(内)、内底(内)直面(内)ハサリ(内)。	P・瓦付属周縁。			
番号	出土位置	種別、初期年代	材質	外径	穿孔	厚さ	重量	保存状況、備考			
5	表層	柱立壙	— (85)	白・淡色系	直壁	暗黄色	内側ヨコ模様打(内側壁)、内底(内)ハサリ(内)。	14kg			
6	表層	柱立壙	—	白・淡色系	直壁	明ホタル色	内側ハテ(内側壁)ハサリ(内)直面(内)。	14kg			
7	表層	軽質陶器 開口	134.2 (320) (77)	白色系	直壁	黑色	内側ヨコ模様打(内側壁)直面(内)によると測定。	保存成規・断面小見。	14kg		
8	表層	軽質陶器 開口	26.4 16.7 12.5	白・淡色系	直壁	灰白色	内側ヨコ模様打(内側壁)直面(内)。	内筒(内)直面(内)、棒足(内)。	全體有り。		
9	表層	軽質陶器 開口	12.2 (14.6) 13.6	粘土質	直壁	オリーブ色	内側ヨコ模様打(内側壁)直面(内)。	P・瓦付属周縁。	1.4kg		
番号	出土位置	種別	初期年代	材質	外径	穿孔	厚さ	重量	保存状況、備考		
10	表層	軽質陶器	1894年	鋼	—	—	237.9mm	6.96mm	127mm	32g	保存 表面剥離。
11	表層	瓦束(瓦束瓦)	1636年	鋼	—	—	233.9mm	6.32mm	116mm	22g	完存。



VI まとめ

今回の調査では古墳時代後期、中世、近世の遺構が確認された。ここでは調査成果を基に本遺跡の主たる遺構である堅穴住居跡・蒼海城堀跡を中心に考察しまとめとしたい。

1 堅穴住居跡

確認された堅穴住居跡16軒の内、年代が特定できないH-2・14・16以外の13軒は概ね古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）の年代が与えられる。周辺遺跡においても概期の住居跡が主体を占めるため本遺跡もその集落の一部を形成していたと考えられる。

住居跡の規格は6×6m前後の方形が多く、H-6・9のような4m四方程度の小形も見受けられる。主軸方向は主に東-西・北東-南西方向に分かれる。四隅には主柱穴が掘られ、竈を有する住居跡については竈正面右脇で貯蔵穴が確認された（H-7は左脇）。竈は東・北東方向（3基）と南西方向（1基）の4基確認され、共通項として壁面への掘り込みが浅く奥壁が直立するため煙道部が短い。焚口から燃焼部にかけての落ち込みが深い、袖・天井の補強材として石材が用いられている等が挙げられる。出土遺物では「模倣坏」の範囲に収まる土師器坏、長胴の土師器壺、須恵器蓋・高坏が共に古墳時代後期の様相を示している。本遺跡周辺の集落は7世紀前半頃で一旦途切れる。その後に集落が続かないのは国府造営に関係するのか単に集落が移動しただけなのか判断とせず、今後の調査課題である。

2 蒼海城堀跡

今回の調査で確認された調査区を東西方向に横断するW-1、調査区中央から南方向へと伸びるW-2は共に蒼海城の堀跡と考えられる。以下では本遺跡と周辺での調査結果を基に蒼海城の堀跡を検討し、本遺跡の堀跡の位置付けと現状での蒼海城に対する認識と課題を明示したい。

蒼海城の歴史

蒼海城が立地する元総社地区は古代に上野国府が存在し、その地割りを利用して城が造られたと云われているが、それを明確に示す文献・考古史料は見つかっていない。築城年代は定かではないが、『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」に「長元元年戊辰（1028）六月、上総介平忠常下総国より引移らる、其の嫡子下総介重常、其の長子千葉介常胤、此の時城镇護のために、五智の如来を城の四方に数箇寺を建立有って安置す」とあり、城（館）としての存在が窺える。また『吾妻鏡』に「治承四年子年（1180）九月晦日巳卯（中略）足利太郎俊綱、平家方人の為、同国府中の民居を焼き払う、是源家に属す輩の居住故也」とある。これは元総社地域を支配していた千葉常胤（源氏方）に対して足利俊綱（平氏方）が府中（国府周辺）を焼き払ったとの記載であり、国府あるいは国府周辺に千葉氏の居館が存在したことが証明できる史料である。こういった居館が初期蒼海城の姿ではないだろうか。

建武四年（1337）、山内上杉憲顕が上野国守護となる。上杉氏の家宰である長尾氏は14世紀中頃までには上野国に入部したと考えられる。その後、長尾氏は白井城の白井長尾氏、蒼海城の総社長尾氏とに分立し守護代として栄えていくことになる。

享徳三年（1454）に開始される享徳の乱は東国全体が戦乱の渦中に巻き込まれていく。上野国でも長尾景春の乱（文明九年、1477）、長享の乱（長享元年、1487～）が相次いで起こる。これらの戦乱を契機として蒼海城も防御施設の拡張を行い城郭化していくと考えられる。「蒼海城絵図」（総社資料館蔵）に描かれている蒼海城はこの時代の姿であろうか。

大永七年（1527）、北条氏綱と諱を結ぶようになった白井・総社長尾氏と上杉方である箕輪・厩橋長野氏との間に抗争が勃発し、蒼海城は長野方業の攻撃を受ける。後に両長尾氏は上杉家との関係を修復するが、長野氏とは依然緊張関係にあった。

永禄九年（1566）九月、甲斐国の武田信玄によって箕輪城が落城、翌年蒼海城も攻略され西上野は武田氏の



支配城となる。蒼海城攻略の論功行賞により高井・川曲・上野・阿弥陀寺（以上前橋市）・栗崎・中島・積尊寺分（前橋市）などが瀬下豊後守に与えられる。高井、阿弥陀寺、積尊寺は元總社周辺にみられる地名である。甘樂郡瀬下郷（富岡市）を本貫地とする瀬下氏は、妙見寺梵鐘銘や「関東幕注文」の總社衆の一人として記載されていることからも長尾氏の有力被官であった。永禄四年（1561）、甘樂に攻め込まれた時に武田方に降伏し、それ以後従っていたと考えられている。

その後、元總社地域は武田・上杉・織田・北条の支配を繰り返し、天正十八年（1590）の小田原落城により徳川家康の支配城となる。蒼海城には同年に源訪頼忠、慶長六年（1601）には源訪頼水（頼忠の子）に替わって秋元長朝が入部する。当時の城内は『上毛伝説雜記』に「戦後荒廃に帰し、普請成り兼ねたるにより城地艮（東北）に長屋を建てて居住した」と記されている。源訪氏在城時は戦乱に明け暮れた城に対して一時凌ぎの修築に留めたと考えられる。秋元長朝は荒廃した城を大改築するよりも父景朝のゆかりの地である植野勝山（現在の總社町付近）に新城（總社城）を築くことを選んだようである。總社城築城までの間は蒼海城の東側に位置する八日市城に居住、慶長十五年（1610）に完成し入城、蒼海城は廃城となった。

周辺遺跡で確認された蒼海城の遺構

蒼海城周辺では近年継続的に行われている区画整理事業に伴う発掘調査により調査成果の増加傾向にある。以



Fig.26 蒼海城縄張図（山崎 一 1978 『群馬県古城壁址の研究 上巻』より）



Tab.4 蒼海城関連年表

年号	西暦	月日	事項	原書・引用文献等
長光元年	1108		上総平左衛門が朝鮮より移りむ。	「木佐伝記述文」(前註記)
			平安朝の末に分家開基、城(城か)浜邊のために、城の四方に数箇寺を建立し坐し野智の 御堂院を安置する。	「土毛伝記述文」(前註記)
治承四年	1180	九月三十日	平家の足利太郎源頼朝・上野国守中にある源家の居宅(「足利の館」)を焼き払う。	「吾妻鏡」
建保三年	1251	四月二十六日	四月十九日(本多忠政)の(大夢・頃大か不削)の後、上野國守方が「先例兵奉の 御堂院」を焼き付ける。	「吾妻鏡」
建保四年	1252	四月二十六日	山内一利(利田)を焼き付ける。	「吾妻鏡」
応永元年	1337		長尾景虎(前田景虎の子)、相模の御堂院を輪林に勘定する。	「木村家文書」
応永十七年	1368	三月九日	長尾景虎(前田景虎の子)、相模の御堂院を輪林に勘定する。	「木村家文書」
永享元年	1419	一一月三日	長尾景虎(前田景虎の子)、相模の御堂院を輪林に勘定する。	「木村家文書」
永享二年	1420	一一月三日	長尾景虎(前田景虎の子)、相模の御堂院を輪林に勘定する。	「木村家文書」
文明十三年	1468		長尾景虎(前田景虎の子)に属する利田の御堂院を引く。	「北畠記」
長享二年	1488	九月二十九日	豊臣秀吉の命により、松野氏(前田景虎の子)に属する御堂院を輪林で数ヶ所の池塘に仕切る。	「梅若無双記」
大永七年	1527	十二月	赤松の長尾御景・赤松宮内大膳・長野方(赤松)の攻撃を受け長尾景虎に救援を	「上野家文書」
享禄元年	1528	正月二十四日	赤松の長尾御景・赤松宮内大膳・長野方(赤松)の攻撃を受け長尾景虎に救援を	「荒森寺伝記」
永禄元年	1558	八月	赤松の長尾御景・赤松宮内大膳・長野方(赤松)に殺害される。長野景政・白井景政(赤松の長尾御景の 娘)をも殺害された。	「荒森寺伝記」
永禄二年	1560		(上総御景)が赤松を守らる。	「荒森寺伝記」
永禄五年	1562	九月	武田信玄・上野の山内氏(赤松・前田)、新田景虎を攻める。	「矢張島小の部(庄右衛門門次所文書)」
永禄七年	1564	六月二十三日	赤松・長尾御景(赤松・長尾景虎)の女房の久保景興について命じる。	「日向文書」
		十二月	工作御用(赤松)、赤松・長尾御景(赤松・長尾景虎)の女房の久保景興を守らせる。	「照高島史」貞治編7・一二二三八
永禄八年	1565	二月七日	初瀬(前田)・浜田(赤松)・上野(宮古)などに実業、赤松(前田)・白井、猿山、尻高の三郡領を 割らる。	「伊豫市守家文書」
		二月二十六日	赤松(前田)・白井(赤松)の陣を払い、赤松(前田)へ移動する。	「永禄日記」
永禄十年	1567	五月一日	赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の四郡領を割らる。	「赤松氏の研究」
天文二年	1568	二月二十八日	赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の五郡領を割らる。	「上野新田(赤山農業)」、「上野諸家所蔵古文書」
天文二年	1568	六月十七日	上野の赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の五郡領を割らる。	「上野新田(赤山農業)」
天文二年	1568	七月二日	赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の五郡領を割らる。	「上野新田(赤山農業)」
天文二年	1569		赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の五郡領を割らる。	「赤松氏史」資料編4 中八・八八八
天文二年	1569	七月五日	小川城の築城に入る。	「赤松氏史」通巻編3 中世
		十一月	神道の御堂院(赤松)に付随する堀跡を発見する。	「赤松氏史」通巻編3 中世
天文二年	1570		赤松(前田)・白井(赤松)・猿山(赤松)・尻高(赤松)・浜田(赤松)の五郡領を割らる。	「赤松氏史」通巻編3 中世
慶長六年	1601		浜田(赤松)に一方...手前で封せられる。城は荒廢し首領し難いため解体 せらる。御守所(赤松)を移す。	「上野伝記述文」(前註記)
慶長七年	1610		御守所(赤松)を定め、赤海城は廃城となる。	「日本城郭大系」4 荘木・赤木・野馬

下では確認された蒼海城の構造について概観したい。

元総社蒼海遺跡群(1)~4トレントではW-3が確認されている。繩張図によれば城北西端部の沼として描かれているが、調査結果からは湛水の痕跡は検出されておらず空堀の可能性が高い。

元総社蒼海遺跡群(6)西側調査区では薦研堀の形態をもつW-3が確認されている。繩張図においては元総社蒼海遺跡群(1)の堀跡と同一のものであり、底部においては空堀に雨水等が流れた痕跡が確認され同様の調査結果を示している。

元総社蒼海遺跡群(14)では1トレントでW-1、5トレントでW-31が堀跡として確認されており、共に東西方向へと走行する。W-1は位置関係からみて後述する元総社蒼海遺跡群(23)23地点、W-2と同一のものと考えられる。

元総社蒼海遺跡群(21)の9地点1区では「鎌田屋敷」に隣接する2時期の堀跡が確認され(W-1・3)、断面観察から古段階であるW-3を埋め戻す際に新段階のW-1の掘削土を使用したことがわかつている。また断面のみではあるがW-1に付随すると考えられる土壙の痕跡も確認されている。27地点については後述する。

元総社蒼海遺跡群(23)23地点ではW-1とW-2が確認され、W-1は土層観察から作り直しの可能性が推測されている。W-2はW-1に対して垂直方向に位置しており規模・位置関係からW-1に付随する堀跡と考えられる。繩張図においてW-1は城域中央部を南北に貫く堀跡に比定される。共に流水の痕跡は確認されていない。24地点及び元総社蒼海遺跡群(21)27地点では700基にも及ぶピット群が確認され蒼海城に間連する建物跡が想定される。また堀跡も古段階とされるW-2(27地点)・5、新段階とされるW-1とW-3・6(27地点)との時期差があることがわかつた。繩張図においてはW-1が北方に位置する本丸と二の丸とを分断する堀跡と描かれている。W-3・6の円形に回る堀跡は丸馬出に伴うものであり、本丸への進入口と考えられる。「松井屋敷」脇の堀跡が想定される25・26地点ではトレント調査が行われ、堀底のみの検出となった。





Tab.5 蒼海城堀跡一覧表

遺跡名	区・地点	遺構名	平均値(m)			断面形状	確認範 (m)	軸方向	堀の形態	出土遺物	備考
			上幅	下幅	深さ						
元経社蒼海遺跡群(1)	4トレンチ	W-3	12	1.2	3.5	逆台形	144	北西-南東	空堀		
元経社蒼海遺跡群(6)	西側調査区	W-3	11	0.3	3	V字状	135	南-北	空堀・墓石軸		
元経社蒼海遺跡群(14)	1トレンチ	W-1	22	1.1	0.6	U字状	53	東-西	-	古墳	
元経社蒼海遺跡群(14)	5トレンチ	W-31	(8.0)	1.6	4.5	V字状	243	東-西	墓石軸	壁跡、埴帯	
元経社蒼海遺跡群(21)	9地点1区	W-1	10.2	2.3	3.3	逆台形	115	南-北	空堀	内耳鏡	
元経社蒼海遺跡群(21)	9地点1区	W-3	4.6	0.5	3.0	V字状	76	南-北	空堀		
元経社蒼海遺跡群(21)	27地点	W-2	(2.6)	(1.8)	1.5	(逆台形)	21.0	南-北	[空堀・箱塗]		
元経社蒼海遺跡群(21)	27地点	W-3	1.3	0.6	1.1	台形	-	-	空堀か	中位から右端側	丸馬出に伴う解説
元経社蒼海遺跡群(23)	35地点	W-1	(5.0)	0.4	2.6	逆台形	305	南-北	空堀	青磁碗	
元経社蒼海遺跡群(23)	23地点	W-2	2.5	0.5	1.2	逆台形	117	東-西	空堀	内耳鏡・鉢	
元経社蒼海遺跡群(23)	23地点	W-1	(3.0)	-	(2.7)	-	160	東-西	-	青磁碗・宝鏡印伝	本丸一二の丸間の解説
元経社蒼海遺跡群(23)	24地点	W-5	2.7	1.5	1.8	逆台形	229	東-西	-	貿易陶器他	
元経社蒼海遺跡群(23)	24地点	W-6	1.3	0.5	1.2	逆台形	-	-	-	金漆大甕	丸馬出に伴う解説
元経社蒼海遺跡群(23)	25-26地点-2号トレンチ	-	-	3.9	-	-	-	-	-	漆塗鏡・板鏡	
元経社蒼海遺跡群(29)	1区	W-1	45	(3.5)	1.8	逆台形	185	東-西	箱塗か	かわらけ、宝鏡印伝	
元経社蒼海遺跡群(29)	1区	W-2	(9.5)	(1.5)	4.0	台形	115	南-北	箱塗か	内耳鏡、火鉢	
元経社蒼海遺跡群(30)	-	W-1	4.5	1.4	1.2	逆台形	232	東-西	空堀・箱塗	かわらけ、五輪塔	
元経社蒼海遺跡群(30)	-	W-2	(1.0)	-	(0.7)	-	175	南-北	-	-	
元経社蒼海遺跡群(31)	-	W-1 a	35	0.6	3.18	V字状	-	東-西	[空堀・箱塗]		
元経社蒼海遺跡群(31)	-	W-1 b	(1.5)	0.4	2.86	V字状	385	東-西	[空堀・箱塗]		
元経社蒼海遺跡群(31)	-	W-1 c	-	-	(3.81)	V字状	-	-	-	-	
元経社蒼海遺跡群(31)	-	W-2	35	0.8	1.0	逆台形	206	南-北	空堀・箱塗		
元経社小見内Ⅲ遺跡群	6区	W-1	(46)	-	(2.3)	逆台形	36	南-北	-	-	
元経社小見内Ⅲ遺跡群	B区	W-2	46	4.2	0.9	逆台形	55	北西-南東	空堀か		
元経社小見内Ⅲ遺跡群	B区	W-3	183	1.18	1.17	U字状	-	北西-南東	空堀か		

（）は測定値、〔 〕は推定値。()は標準偏差・標準を示す。

元経社蒼海遺跡群(29)の1区では現道を挟んで東西方向(W-1)と南北方向(W-2)に走行する堀跡が確認された。W-1は東端部で底面が段状に上がる。底面土層では水成堆積の痕跡を確認、雨水によるものと考えたい。

元経社蒼海遺跡群(30)では南北・東西方向に走行するW-1・2が確認されている。W-1底面は西に向かって緩やかに傾斜しており雨水の流れ込みの痕跡が確認できる。W-2は調査区隔壁のため全容は把握できていない。

元経社小見内Ⅲ遺跡群の6区ではW-2・3が確認されている。前述した元経社蒼海遺跡群(23)23地点、W-2の北延長部にあたると想定される。

小見内Ⅲ遺跡のB区ではW-2・3が確認されている。元経社蒼海遺跡群(1)・(6)と同様の堀跡と考えられる。

堀跡の検討

山崎一氏の縦張図(Fig.26)は地形・現存遺構を基に描かれたものであり、現況からの蒼海城の姿を示している。また総社資料館には「蒼海城絵図」が収蔵しており、総社長尾氏時代といわれている蒼海城が描かれている。ここでは調査で確認された堀跡を「蒼海城絵図」と山崎氏の縦張図を参考に蒼海城の堀跡の想定を試みたい。なお今回想定する堀跡ラインは総社長尾氏在城時(ここでは古段階と考えたい)のものとし新段階の堀跡は省略、調査結果で時期判別されていないものは今回の想定に限り古段階のものとして考えた。

蒼海地域の発掘調査結果を前橋市発行都市計画図に落とし込み、「蒼海城絵図」と山崎氏の縦張図から想定される堀跡ラインを描いたものがFig.27元経社蒼海遺跡群(31)周辺蒼海城想定図である。⁽⁴⁾発掘調査で確認された堀跡は概ね絵図に記載されているものと一致する。調査例の少ない本丸以西では明確な堀跡ラインはみられず想定の域を出ない。ラインに乗る堀跡は概ね深さ3m以上で郭間の区画・防護性からみても十分なものであり、空堀の薬剤・箱塗の形態を示す。時期差・改修が認められる堀跡は本遺跡を含めて5地点である。

次に本遺跡について考えたい。W-1は絵図によれば源訪屋敷と記載されている箇所の北側の堀跡にあたる。W-1は3時期の造り替えが確認できるため一番古いW-1 cがこれに該当する。根拠としてはW-1 a・bが



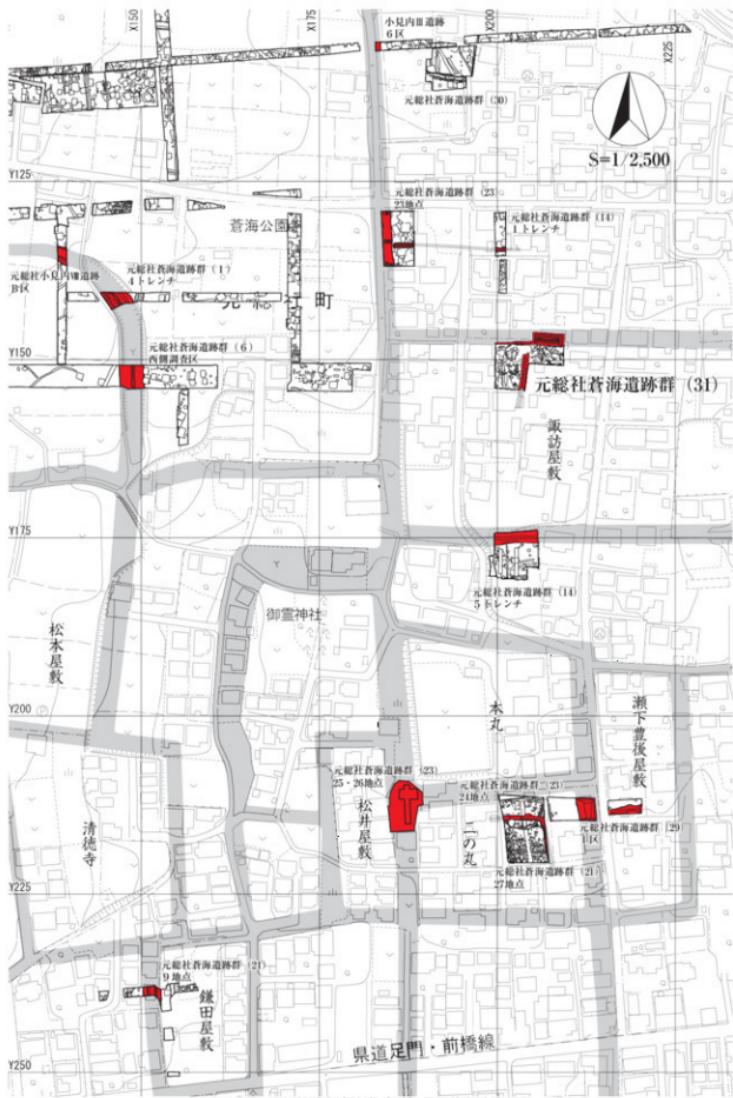


Fig.27 元總社蒼海遺跡群 (31) 周辺蒼海城想定図



W-1 c と比較して堀底が浅いということが挙げられる。これは防御性を重視せずに簡易・早急的な修築をして行われた可能性が高く、初期段階においては十分な防御性を確保するため深く掘られたと考えるからである。W-1 a・b は大規模な修築を必要としたかった源氏・秋元氏時代のものとするのが妥当ではないだろうか。W-1 と比較するとやや小規模の W-2 は絵図に記載はないが W-1 との位置関係をみれば付随する堀跡だと理解できる。この種のものは元総社蒼海遺跡群(23) 23 地点でもみられ、共に大(W-1) 小(W-2) の関係にある。規模や位置関係から W-2 は郭間の堀跡というよりは、郭内を区画する堀跡と考えるべきであろう。この様な堀跡は元総社蒼海遺跡群(21) 27 地点・(23) 24 地点にも認められる(W-2・5)。ここでは二の丸の中央部を区画(方形か) しており、内側から大量の柱穴が確認されている状況からも建物を区画していた堀跡と考えられる。この W-2・5 は他の堀跡との複重関係から古段階のものとされているが、絵図には記載がみられない。郭内の構造物等は省略して描かれているからであろう。

以上の事から本遺跡で確認された W-1 は源氏屋敷の堀跡であり、総社長尾氏時代から廃城になるまで改修を受けながら存在していたと考えられる。また W-2 は源氏屋敷内を区画する堀跡と位置付けたい。

蒼海城の改修に関しては旧段階のものを踏襲している事例からも大規模ではなく部分的な修築に留まつようである。広大な城域・繩張の制約等が足枷になっていたのかもしれない。

課題

本遺跡・周辺遺跡の調査結果から蒼海城堀跡の想定を試みたが全体像を知る上ではまだ調査事例が少ないというのが現状である。主要な堀跡の状況はある程度つかめてきたが、城の中核を成す本丸から西側は未調査地であるため解明には至っておらず、発掘調査が待ち望まれる地域である。また二の丸にあたる元総社蒼海遺跡群(21) 27 地点で 700 基を越える柱穴が確認されているように郭内の建物の存在も注視しなければならないだろう。修築年代についても文献史料に乏しく、発掘調査による遺構・遺物からの想定に頼らざるをえない状況にある。「蒼海城絵図」と他絵図との比較を行い年代・城内構造を把握する必要もある。

課題が山積みではあるが近年の発掘調査によって蒼海城解明への道がようやく開き始めたと考えたい。今回示した堀跡ラインは現状での調査結果・絵図・繩張図・踏査において報告者が想定したものであり、今後行われるであろう蒼海城周辺での発掘調査結果によっては修正される箇所が多々あると思われる。ここで試案が今後蒼海城を調査・研究する上での礎の一部になれば報告者としては幸いである。

註

- (1) 「修史館本替社長尾系図」応永元年(1368)三月九日。社長尾氏の相続が社長尾氏を勤める記載が認められるため、それ以前の入部と考えられる。
- (2) 小糸智夫: 2001「中世の灘下式」
- (3) 以上は本遺跡周辺の調査結果を中心とした。
- (4) 既の書籍は「蒼海城絵図」を参考にした。
- (5) 本遺跡 W-1・元総社蒼海遺跡群(21) 9 地点。元総社蒼海遺跡群(21) 27 地点・(23) 24 地点。元総社蒼海遺跡群(21) 23 地点。元総社小見内遺跡。
- (6) 「高崎市史 第一部」に豪華な門ごとに櫛型と記述される絵図が記載されている。

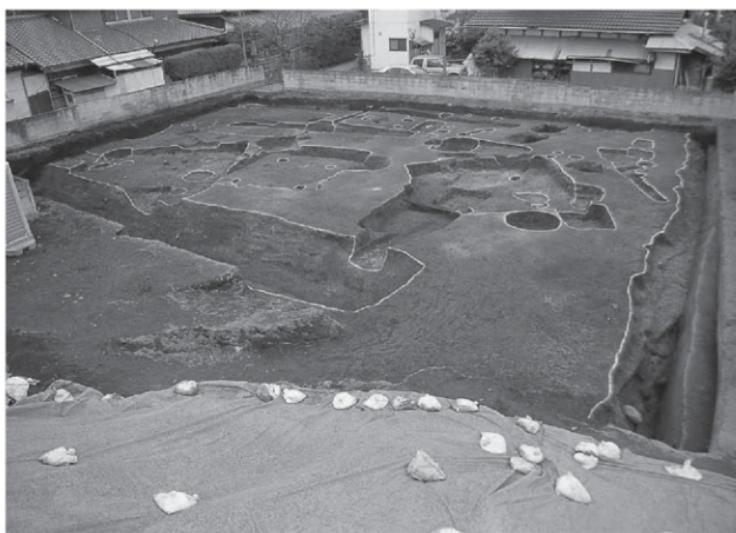
参考文献

- 勝守千み 1978 「長尾氏の研究」『関東武士研究叢書 第6号』著者出版
 山崎一 1978 「吾馬筋古墳群の研究 上巻」群馬県文化財研究会
 山崎一 1979 「日本古墳大系 第4巻 美城・相木・吾馬」新人物文庫
 近藤義雄 1966 「筑紫南朝の歴史 豊後朝の歴史シリーズ」あかがね出版
 久保田順一 1996 「江戸武士の歴史」みやこ文庫
 黒川信樹 1997 「源氏人名と外様国図」文献出版社
 黒川信樹 2001 「源氏人名の大名と国図」岩波書店
 萩原義久・黒川信樹 2002 「源氏人名 武川氏編 第二卷」東京堂出版
 久保田順一 2006 「源氏・朝倉・上野の城社会」岩波書店
 久保田順一・板森直弘 2009 「丸山人と朝鮮上陸」「九州論 Vol.31」上毛新聞社
 板森直弘 2009 「戦争の日本史 第四回『源氏の繼承』」吉川弘文館
 吉川弘文館委員会 1968 「吉川弘文館」吉川弘文館
 吉川弘文館委員会 1973 「高崎市史 第一部」高崎市
 吉川弘文館委員会 1985 「高崎市史 第六卷」高崎市
 吾馬筋教育委員会 1988 「吾馬筋の中世城跡」
 吾馬筋教育委員会 1989 「吾馬筋地 史跡編 第一部」吾馬筋
 吾馬筋教育委員会 1994 「吾馬筋地 史跡編 第一部」吾馬筋
 吾馬筋教育委員会文化財保護課 1999 「前掛城跡説定」
 吾馬筋教育委員会 2000 「吾掛城跡」
 大橋一二・西田文子 1968 「別府太陽・吉伊万里」平凡社
 江戸遺跡研究会 1990 「江戸の遺跡」江戸遺跡研究会第3回大会
 江戸遺跡研究会 2000 「日暮江戸考古学研究資料集」柏原伸
 久保田順一・板森直弘 2009 「江戸風景における武田氏内閣陶器の生産と流通」栗原・北山・北海道編
 吉川弘文館委員会 1968 「吉川弘文館」吉川弘文館





PL. 1



調査区西側 全景（東から）



調査区東側 全景（西から）



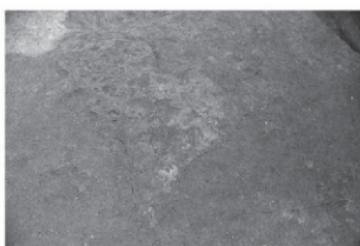
PL. 2



H-1号住居跡 全景 (北から)



H-1号住居跡 遺物出土状況 (北西から)



H-2号住居跡硬化面 硬化面検出状況 (西から)



H-3号住居跡 硬化面検出状況 (北西から)



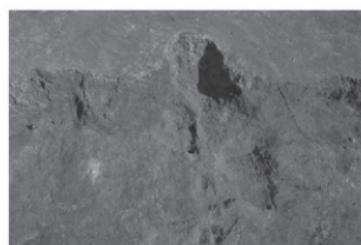
H-4号住居跡 全景 (西から)



H-5号住居跡 全景 (西から)



H-5号住居跡 こも編石出土状況 (北から)



H-5号住居跡 電全景 (西から)



PL. 3



H-6号住居跡 全景（西から）



H-6号住居跡 電全景（西から）



H-7号住居跡 全景（北から）



H-7号住居跡 電全景（北から）



H-8号住居跡 全景（東から）



H-9号住居跡 全景（南から）



H-10号住居跡 全景（西から）



H-10号住居跡 電全景（西から）



PL. 4



H-11号住居跡 全景 (西から)



H-12号住居跡 全景 (西から)



H-13号住居跡 全景 (西から)



H-14号住居跡 全景 (北から)



H-15号住居跡 全景 (北から)



H-16号住居跡 全景 (西から)



A-1号道路状道構 東側全景 (西から)



W-1号溝 西側全景 (東から)



PL. 5



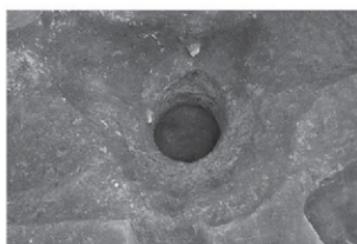
W-1号溝 東側全景 (東から)



W-1号溝 土層断面 (西から)



W-2号溝 全景 (南西から)



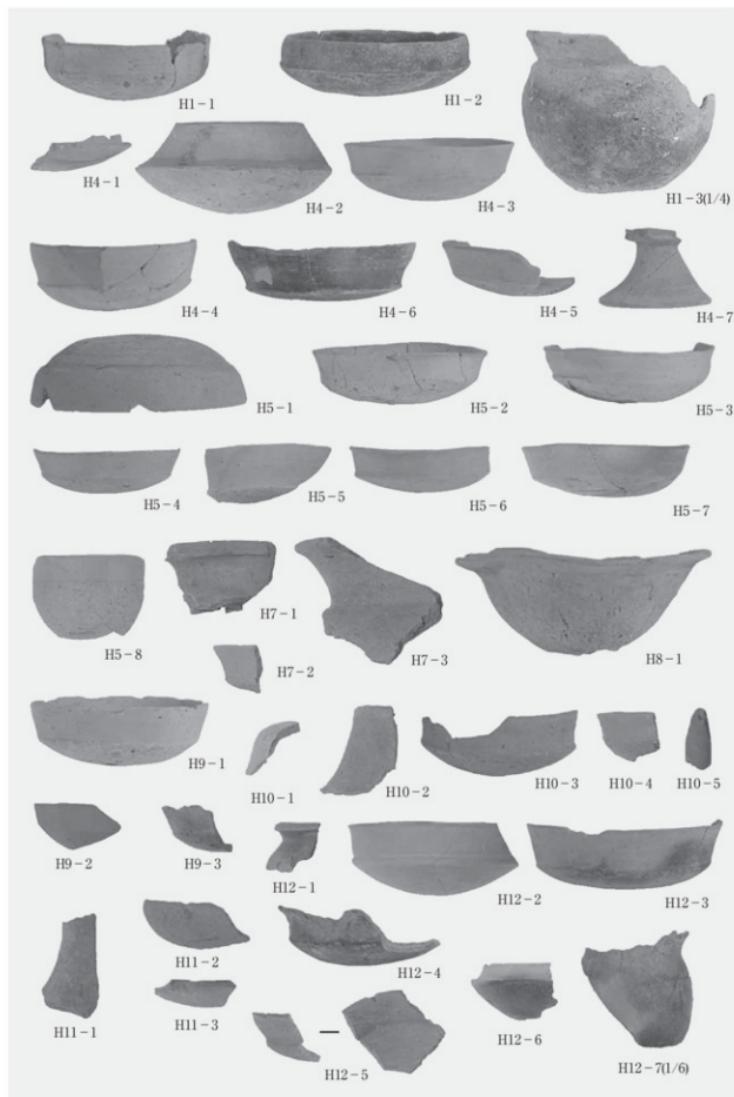
T-1号井戸 全景 (西から)



調査風景 (南西から)

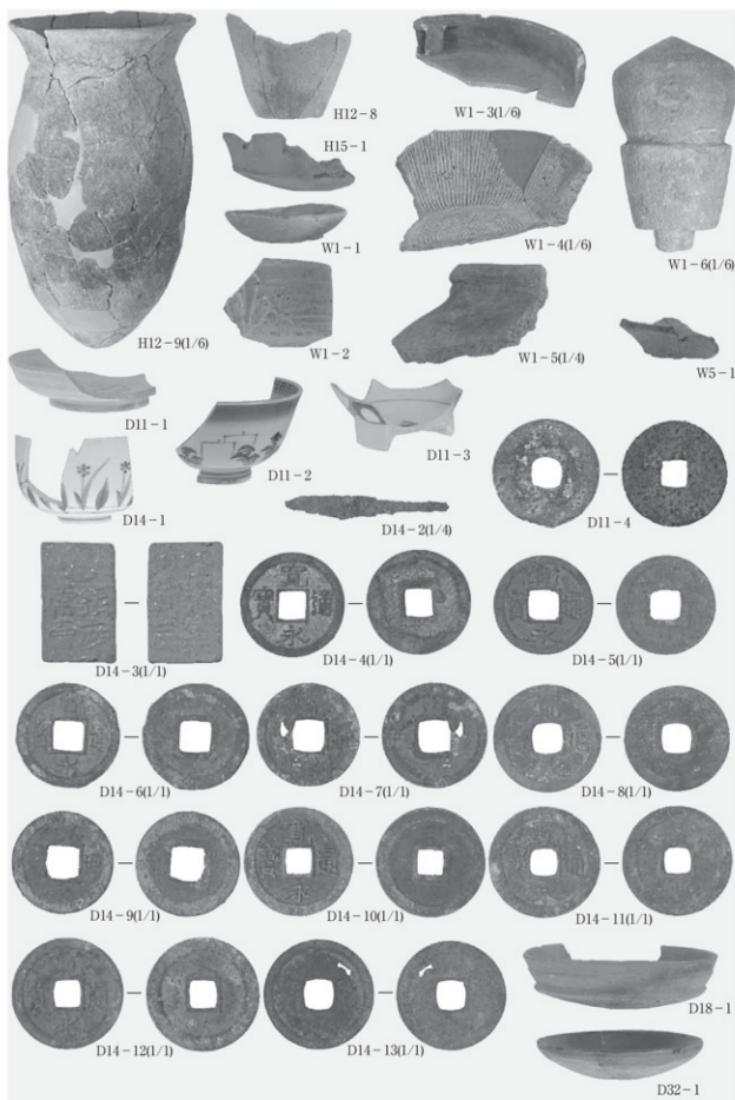


PL. 6





PL. 7





PL. 8





報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミセキダン(31)
書名	元総社蒼海遺跡群(31)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	神宮 聰・佐野 良平
編集機関	技研測量設計株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町2-10-2
発行年月日	2010年12月17日

フリガナ	フリガナ	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
元総社蒼海遺跡群 (31)	前橋市元総社町 1965はか	102021	21A130-31	36°23'19"	139°2'15"	2010.01.18 ～ 2010.03.12	915m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海上地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (31)	集落跡 その他	古墳時代 中世	竪穴住居跡 16軒 道路状遺構 1条 掘溝 5条 井戸 1基 土坑 ピット 51基	須恵器 土師器 かわらけ 陶磁器 五輪塔 古銭	古墳時代後期の 集落遺跡。 蒼海域の痕跡。

元総社蒼海遺跡群(31)

前橋都市計画事業元総社蒼海上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年12月7日 印刷

2010年12月17日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0018 群馬県前橋市三保町2-10-2

TEL 027-231-9531

編集

技研測量設計株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社









